

令和2年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)
研究開発報告書

第2年次



徳島県立城西高等学校神山校

本報告書は、文部科学省の委託事業として、徳島県教育委員会が実施した令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

令和2年度 活動記録

4月



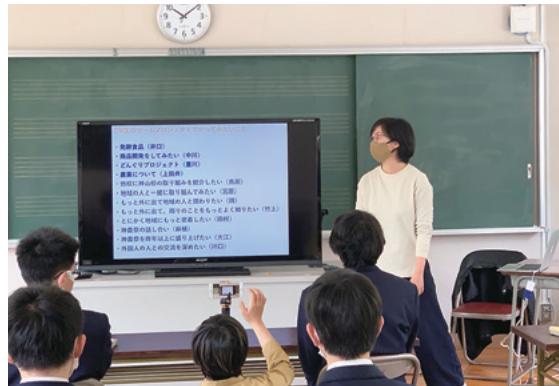
神山小麦の除草作業



収穫前の神山小麦



オンライン授業の説明



神山創造学でのテーマ設定



オンライン授業の様子



第1回プロジェクトチーム会議

5月



森林ビジョンフィールドワーク



神山小麦の種取り

6月



プロジェクトアドベンチャー



プロジェクトアドベンチャー



どんぐりプロジェクト垣根施工



神山創造学フィールドワーク



神山校で育む力職員研修



森林ビジョン演習林実習

7月



キャリア教育講演会（IT 関連）



課題研究中間報告会

8月



JGAP 維持審査（一般公開）



孫の手プロジェクト



林業アカデミー研修



林業アカデミー研修



林業機械操作研修



神山蕎麦のは種

9月



まめのくぼプロジェクト中間報告会



課題研究作品制作

10月



オープンスクール（座談会）



神山小麦のは種



1年生しごと体験



1年生しごと体験



しごと体験報告会



進路ガイダンス



道の駅販売活動



道の駅販売活動

11月

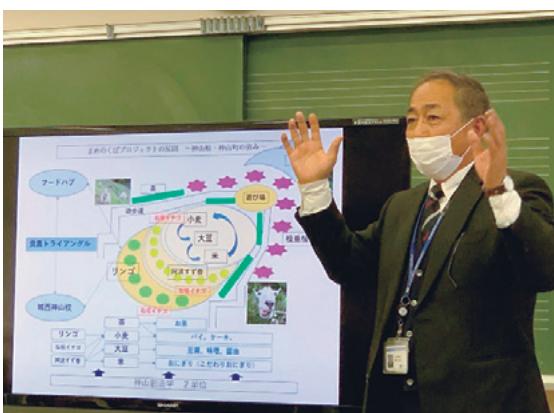
12月



造園技能検定3級講習会



神山小麦シカ食害対策



カリキュラム開発専門家会議



神山創造学チームでのふり返り



課題研究発表会



課題研究発表会

1月



課題研究発表会



コンソーシアム会議

2月



石積み修復研修



石積み修復研修



石積み修復研修



石積み修復研修



地域での聞き書き



地域での聞き書き

はじめに

校長 阿部 隆

令和元年度より本校は、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の研究指定を受け、地域をフィールドとして学び、地域の発展とともに活性化する神山校を目指した「中山間地の地域内循環モデルの構築」をテーマとし、昨年度より研究開発に取り組んでおります。この度、その成果と課題について2年目としての「研究開発報告書」をまとめることができました。

本報告書の作成にあたり、関係の皆様方からの御支援並びに御協力により完成させることができました。心より感謝申し上げます。

本校は、県都徳島市に隣接する名西郡神山町に存する全校生徒85名の小規模校です。昨年度より従来の生活科・造園土木科の2学科を再編し、地域創生類を設置しており、その中で地域と連携した教育活動を推進し、地域に根ざした持続可能な循環型の農業教育を通じて学校の活性化を図り、地域産業や地域社会に貢献できる人材の育成に取り組んでおります。

神山町は、鮎喰川の上流域に位置し、周囲を山に囲まれた中山間地で林業を中心に栄えてきた経緯があるものの、長年の林業不振により衰退の一途をたどっています。また、現在の人口は約5000人と人口減少に併せ高齢化が著しく進行し、町の存続が大きな課題の一つになっています。併せて、高齢化が進むことで、耕作放棄地を増加させるなど農林業離れに拍車をかける現状です。

2015年に策定した神山町の創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」により、課題解決に向け具体的な施策とそれらを推進していく組織「一般社団法人神山つなぐ公社（以下、神山つなぐ公社という。）」が設立された。神山つなぐ公社は神山町活性化のためのプロジェクトを実現していくために、町内外の様々な人、企業、関係団体、学校等に働きかけ、施策の実現に向けて協働した取組を強力に推進しています。その中で、町内唯一の高校である神山校は、神山町の未来につながる地域教育の拠点として位置付けられ農業高校ならではの専門性を活かし、地域連携や地域の魅力づくり、地域に担い手育成に向けた取組に大きな期待が寄せられています。一方、学校も神山町との連携により、多くの実践的活動を取り入れ、学校のさらなる活性化を目指し日々積極的に取り組んでいるところであります。

地域の思いや願い、期待と神山校が思い描く教育の方向性を結び付けるために学校設定科目「神山創造学」を設定し、地域貢献の足がかりとしています。また、平成29年度からは、神山校の教職員と神山つなぐ校舎等の職員が中心となり、町全体を学びの場として捉えた体験的学习を追究してきました。さらには、その他の科目でも、神山町の施策に連動したプロジェクトに生徒自身が関わることで、町役場や地域住民、企業、大学等と連携した教育、学校と地域との協働による学びを昨年度に増して深めつつあります。

本事業ではその趣旨や目的をしっかりと踏まえ、「神山創造学」並びにその他の教育活動を深化させる中で新たな取組を実践しつつ、その成果と課題を検証することが大切であり、今後の神山校と地域の連携・協働の在り方やカリキュラムを開発推進するものであると結論付けました。

2年目の成果と課題については、昨年度を踏まえ、学校と地域で共有し、最終年度となる次年度の地域との協働に活かせてまいります。これまでの事業実施に御協力くださったコンソーシアムを構成する神山町をはじめ、神山つなぐ公社、株式会社フードハブプロジェクト、大学、地元教育機関等、多くの関係者の方々、そして御指導並びに御助言をいただきましたすべての皆様に深甚なる感謝を申し上げ、冒頭の挨拶とさせていただきます。

目 次

I	研究開発実施報告（要約）	1
II	研究開発の内容	9
1	「神山創造学」の再構築	11
(1)	神山創造学Ⅰの取組	11
(2)	神山創造学Ⅱの取組	19
(3)	課題研究への接続	27
(4)	グランドデザインおよびルーブリックの作成と評価	37
(5)	キャリア教育の取組	40
(6)	プロジェクトアドベンチャー研修	47
(7)	基礎学力の強化	48
2	地域性を生かした質の高い教育環境の整備	50
(1)	造園教育における「専門人材の配置」	50
(2)	多様な地域連携を実現する教育課程の構築	51
3	地域の生産・交流拠点の創出	52
(1)	神山小麦の生産・加工	52
(2)	道の駅の販売活動	54
4	地域を学びの場とした実践	56
(1)	神山町をフィールドとした「森林ビジョン」	56
(2)-1	耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」栽培活動	62
(2)-2	耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」石積み研修	69
III	コンソーシアム会議	75
1	コンソーシアム会議について	77
(1)	各分科会報告	
①	キャリア教育の取組状況と課題について	79
②	本校教育活動における有効的な広報戦略について	80
③	まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開	81
④	まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開	81
IV	成果・課題	83
V	資料	87
1	目標設定シート	89
2	高校魅力化評価システム診断結果	91
3	教育課程	92

I 研究開発実施報告（要約）

1 研究開発名

地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～

2 研究開発概要

次の項目を、神山校を中心としたコンソーシアムと連携して取り組む。

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| (1) 「神山創造学」の再構築 | (2) 地域性を生かした質の高い教育環境の整備 |
| (3) 地域の生産・交流拠点の創出 | (4) 地域を学びの場とした実践 |

3 運営指導委員会について

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年1月22日	課題研究発表会見学
令和3年2月18日	第1回運営指導委員会 神山創造学Ⅰ・神山創造学Ⅱ・課題研究について、本年度の取り組み、評価方法、今後の課題について授業担当者から報告を行った。運営指導委員からのフィードバックでは、「一連の流れを持って取組を行っているが全体として評価基準の統一が必要」「評価者の選定方法や研究課題の工夫を行う」「伝えるは良いテーマなので、コミュニケーション能力を鍛える方法と個人ごとのカスタマイズされた処方箋を考えて欲しい」「SDGSを意識した農業高校ならでは取組を実現して欲しい」「伝える・協働するはかなり伸びているが、深める（探求する力）部分の取組も重要なところではないか」等の指導助言をいただくことができた。

4 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムについて

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年10月31日	オープンスクール見学
令和2年10月31日 (第1回)	第1回会合 ・全体会：本年度プロジェクトチーム会議について、地域みらいオンライン留学と2daysについて、これまでの事業の取組について、昨年度分科会振り返り（キャリア教育、神山創造学、まめのくぼ、森林ビジョン） ・分科会：キャリア教育の取組状況と課題、本校教育活動における有効的な広報戦略、まめのくぼプロジェクト（食農部門の取組と今後の展開）、まめのくぼプロジェクト（環境部門の取組と今後の展開） ・全体会：各分科会での報告、今後の展開を検討
※令和3年1月22日	課題研究発表会見学、第2回会合 ・全体会 課題研究発表会へのフィードバック ・分科会：キャリア教育の取組状況と課題、本校教育活動における有効的な広報戦略、まめのくぼプロジェクト（食農部門の取組と今後の展開）、まめのくぼプロジェクト（環境部門の取組と今後の展開） ・全体会：各分科会での報告内容の共有

5 カリキュラム開発専門家について

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年10月17日	(とくしま木づかいアワード表彰式会場にて) 尾崎氏より神山校の木育の取組についての助言をいただく
令和2年10月31日	尾崎・安永氏、オープンスクール見学、第1回コンソーシアム会議
令和2年11月10日	尾崎氏と次年度カリキュラム開発の打合せを行う。
令和2年11月18日	安永氏と次年度カリキュラム開発の打合せを行う。
令和2年11月28日	尾崎氏来校、まめのくぼ現地視察と生徒木工作品の説明、打合せを行う
令和2年12月3日	安永氏来校、まめのくぼ現地視察と神山小麦栽培状況の説明、打合せを行う
令和2年12月10日	第1回カリキュラム開発専門家会議 ・2年生神山創造学増設2単位分の実施状況と今後の展開について協議 ・「まめのくぼプロジェクト」で、生徒に「何を学ばせ」「何を身に付けさせる」かを協議
令和2年12月15日	安永氏来校、地域性種苗についての助言をいただく
令和3年2月17日	安永氏来校、神山小麦の6次産業化について助言をいただく

6 地域協働学習実施支援員について

実施日程・実施内容

日程	内容
令和2年5月20日	森山・樋口氏、第1回プロジェクトチーム会議に出席 研究開発の実施状況と1年目の成果と課題、事業終了時の到達目標について協議
令和2年6月5日	森山・樋口氏、第2回プロジェクトチーム会議に出席 2年目の事業終了時到達目標とオープンスクール・体験入学の検討、コンソーシアム会議の実施判断と各研究開発の年間計画について協議、地域留学体験・オンライン企画の検討
令和2年7月7日	森山・梅田・樋口氏、第3回プロジェクトチーム会議に出席 今年度の体験入学、地域留学体験についてと2年目の事業終了時の到達目標について協議
令和2年7月11日	森山氏、地域みらい留学特別イベント『これからの時代の地域と教育の未来』へ参加
令和2年7月25日 ～7月26日	森山・秋山氏、地域みらい留学フェスタ／テーマ別説明会＆個別説明会へ参加
令和2年8月5日	森山・梅田・樋口氏、第4回プロジェクトチーム会議に出席 職員研修、地域みらい留学フェスタ、インターンシップについて協議
令和2年8月17日 ～8月21日	梅田氏、まちぐるみ高校生インターンシップへ巡回指導で参加、2年生5名が参加
令和2年8月22日 ～8月23日	森山・秋山氏、地域みらい留学フェスタ／テーマ別説明会＆個別説明会へ参加

日 程	内 容
令和2年8月31日	森山・秋山・梅田・樋口氏、カリキュラムマネジメント研修へ参加
令和2年9月2日	森山・樋口氏、第5回プロジェクトチーム会議に出席 地域留学体験報告、カリキュラムマネジメント研修振り返りオープンスクールと第1回コンソーシアム会議について協議
令和2年10月3日 ～10月4日	森山・秋山氏、地域みらい留学フェスタ／テーマ別説明会＆個別説明会へ参加
令和2年10月6日	森山・樋口氏、第6回プロジェクトチーム会議に出席 オープンスクールと第1回コンソーシアム会議、全国サミット、ルーブリック作成について協議
令和2年10月31日	森山・秋山・梅田・樋口氏、オープンスクールと第1回コンソーシアム会議へ参加
令和2年11月5日	森山・樋口氏、第7回プロジェクトチーム会議に出席 オープンスクールと第1回コンソーシアム会議振り返りカリキュラム開発専門家会議、課題研究発表会の協議
令和2年11月14日	森山・秋山・梅田・樋口氏 文化祭に参加 神山創造学報告会の発表指導と補助を行う
令和2年12月3日	森山・樋口氏、第8回プロジェクトチーム会議に出席 カリキュラム開発専門家会議、課題研究発表会、第2回コンソーシアム会議、ルーブリック進捗状況について協議
令和2年12月10日	森山・樋口氏、第1回カリキュラム開発等専門家会議に出席
令和3年1月8日	森山・樋口氏、第9回プロジェクトチーム会議に出席 課題研究発表会・第2回コンソーシアム会議の運営、第1回運営指導委員会の打ち合わせを行う。
令和3年2月1日	森山・樋口氏、第10回プロジェクトチーム会議に出席 課題研究発表会・第2回コンソーシアム会議の振り返り、第1回運営指導委員会および研究開発報告書の打ち合わせを行う。

7 管理機関について

(1) 管理機関における取組について

日 程	内 容
令和2年5月20日	○第1回プロジェクトチーム会議に出席（中川）
令和2年6月5日	○第2回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年7月7日	○第3回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年8月5日	○第4回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年9月2日	○第5回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年10月31日	○オープンスクールと第1回コンソーシアム会議へ参加（中川・寒川）
令和2年11月5日	○第7回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年12月3日	○第8回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年12月10日	○第1回カリキュラム開発等専門家会議に出席（中川・寒川）

○：コンソーシアムのプロジェクトチームによる取組、◎：コンソーシアムによる取組

(2) 実績の説明

- ・プロジェクトチーム会議等において、事業全般を見通しての指導助言や事業管理、大学連携や研究開発の方向性の提案等を行った。
- ・令和2年度は地域協働学習実施支援員全4名を社会人講師として雇用、令和3年度も同様に4名を雇用予定である。
- ・神山校の取組を参考に、徳島県独自に「ふるさと協働による高校教育の質の向上・充実化事業」を実施し、地域との協働・連携により高校教育の質の向上や魅力化を進める高校として3校を指定して地域との連携・協働を進める取組を支援した。令和3年度も同様に事業を継続する。

(3) 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・現在のコンソーシアムの構成員を学校運営協議会委員に委嘱し、コミュニティ・スクールとして引き続きコンソーシアムによる地域との連携・協働を進める。
- ・地域協働学習実施支援員を引き続き徳島県が社会人講師として雇用する。

8 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」におけるフィールドワーク			1	3								
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」における活動報告				1			1					
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」によるプロジェクト活動			1			3	3	3	1			
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」による活動報告				2								
科目「課題研究」における造園土木科の活動			5	5	1	5	5	3	1			
科目「課題研究」における生活科の活動			5	5	1	5	5	3	1			
キャリア教育充実における仕事体験					3		2		1			
キャリア教育充実におけるインターンシップ					5							
キャリア教育充実における講話		2	2						1		1	
他教科等と関連させた指導											2	
基礎学力の強化のための「学びの基礎診断」	1									1		
地域性を生かした「専門人材の配置」		2										
地域性を生かした「スタディツアーア」												
地域の生産・交流拠点としての「シードバンク」		4	3				1					
地域の生産・交流拠点としての「校庭マルシェ」								1				
地域を学びの場としての「森林ビジョン」			7		2		1					
地域を学びの場としての「耕作放棄地対策」				1	1	3	3	3	1			
地域を学びの場としての「石積み修復」				1	1	3	3	3	1			

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

○「神山創造学」の再構築

「神山創造学Ⅰ」では、生徒が町内のフィールドワークを通じて、歴史・文化・暮らし・産業などの調査を行った。「神山創造学Ⅱ」では、地域の将来を見据えた施策を行う行政や地元企業と協働して、課題解決に向けたプロジェクト学習に取り組んだ。増設2単位分で、耕作放棄地の有効利用について実施し、石積み修復や地域性種苗の栽培と加工、商品開発に取り組んだ。そして3年次での「課題研究」に発展できるよう、活動内容報告会を年間2回実施した。

○地域性を生かした質の高い教育環境の整備

コンソーシアムメンバーの有するネットワークを活用して講師を招聘しキャリア教育における進路選択意識の向上や、ルーブリック・グランドデザイン作成についての考え方を深める講演会や研修を実施した。また、カリキュラム開発等専門家の指導助言を受け、地域の課題である耕作放棄地の利活用について、将来に向けてのビジョンを考え実行することができた。

○地域の生産・交流拠点の創出

地域性種苗のコムギとソバを栽培し、校内で種を保管できるようになった。また、「校庭マルシェ」開催は本年度開催見送りとなり、代替行事として「道の駅神山」で農産物や花苗の販売、課題研究成果発表と「神山創造学Ⅱ」のチームプロジェクトを実施する場としてイベント「ハーベスト」を実施した。神山校以外にも、城西高校、小松島西勝浦校も参加し合同開催することで、来場者も多く、活動発表の機会に恵まれた。

○地域を学びの場とした実践

学校の演習林や、町内の耕作放棄地、町内の石積み修復を学びの場として、教科書や実習で学んだことを生かした様々な取組を実施した。特に耕作放棄地の取組は、「神山創造学Ⅱ」増設2単位分の活動に位置づけて取り組み、コース学習の要となって意欲的に活動する生徒の姿が見られた。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

○「神山創造学Ⅰ」（2単位）第1学年対象 ※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員2名、1学年担任2名、地域協働学習実施支援員2名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考查

学習内容：・「神山創造学」を学ぶにあたって ・地域の現状を学ぶ
・地域の課題解決に向けた取組み ・職業体験プロジェクト
・聞き書きプロジェクト ・調査のまとめと発表

○「神山創造学Ⅱ A」（4単位）第2学年環境デザインコース対象

※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員2名、2学年担任2名、地域協働学習実施支援員3名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考查

学習内容：・チームプロジェクト（課題調査、課題解決の実践など）
国際交流、神農祭、神山PR、地域貢献、環境保全の5チーム毎に実施
・まめのくぼプロジェクト景観創造活動
・プロジェクトのまとめと発表 ・活動報告作成

○「神山創造学Ⅱ B」（4単位）第2学年食農プロデュースコース対象

※教科「農業」の学校設定科目

指導体制：農業科教員2名、2学年担任2名、地域協働学習実施支援員3名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

（各学期末）定期考查

学習内容：・チームプロジェクト（課題調査、課題解決の実践など）

　　国際交流、神農祭、神山PR、地域貢献、環境保全の5チーム毎に実施

・まめのくぼプロジェクト6次産業化活動

・プロジェクトのまとめと発表　・活動報告作成

○「課題研究」（4単位）第3学年対象

教科「農業」の科目、総合的な学習（探究）の時間の代替科目

指導体制：農業科教員4名

評価の観点：「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

評価方法：（毎時間）「観察法（学習態度、実施状況）」「プリント等の記録」

主な内容：・課題の設定　・調査・研究・実験・作品製作等　・中間発表

・課題研究「実践集」原稿作成　・課題研究発表会

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に連動させ、教科等横断的な学習とする取組について

○「フードデザイン」（2単位）第2学年対象 「神山創造学Ⅱ B」と関連した指導

・食品の素材要素について学習し、作物栽培と生活文化の関連性について考えた。

・地域性種苗の重要性と商品開発の可能性について地域の食品製造企業の方を講師に招き、実際のパンづくりを通して学習した。

④ 類型毎の趣旨に応じた取組について

「神山創造学」では、生徒が町内でのフィールドワークを通して、地域の人との関係性を育み、地域で受け継がれてきた文化、仕事、産業について調査や研究を深め、そして地域の課題に気づき、本人が探究したいテーマを見つけ解決していくことを学んでいる。課題を解決することを一つのきっかけにして、将来の進路決定につないでいく取組になっている。さらに研究開発を進行することにより、地域との連携がより深まると、地域の人に生徒の実践が見えやすくなるとともに、本校の取組に対する地域からの評価を受けて、PDCAサイクルを構築できる。

3年間で地域の人と関わっていくことや、地域内の環境、食農、経済における地域内循環システムを生徒自ら体験することで、地域の担い手として具体的に果たすべき役割を自覚するとともに、学んだことを将来の進路に生かせる機会となっている。

II 研究開発の内容

1 「神山創造学」の再構築

(1) 神山創造学 I の取組

① 授業内容

a 神山を知るためのフィールドワーク

〔実施内容〕

○事前学習（令和2年6月17日）

生徒たちへフィールドワークや各コースについての説明とコース選択を行った。友達と同じ場所に行くのではなく、興味関心の高い場所を選ぶように指示を出した。また、制限人数を超えた場合には、生徒間で相談させて決定させた。また、メモを取ることの重要性や質問を必ずするなど生徒たちと最終確認を行った。

(コース)

コース名	日程	行き先など
自然に触れる	6月24日・7月7日	雨乞いの滝
アートを感じる	6月24日・7月1日・7月7日	大栗山アートツアー
職人に会いに行く	7月1日	豆千代→かまパン→曲げわっぱ工房
	7月7日	豆千代→えんがわ→曲げわっぱ工房
地元の面白い大人に会う	7月1日・7月7日	岳人の森
働き方を知る	6月24日・7月1日	SanSan 株式会社→ユサンピザ
建物を見る	6月24日・7月1日・7月7日	大塙地の集合住宅

○フィールドワーク（令和2年6月24日(水)・7月1日(水)・7月7日(水)）

生徒たちは、それぞれが選択したコースに分かれ、様々な刺激を受け、有意義な時間を過ごした。フィールドワーク後は、学校にてグループごとに印象に残っている写真の発表と、どこでどんな話を聞き、何を感じたかなどについて振り返りを行った。



図1 【アートを感じる】



図2 【働き方を知る】



図3 【職人に会いに行く】



図4 【地元の面白い大人に会う】

○振り返り（令和2年7月22日）

授業前半で、写真家の近藤奈央さんより写真タイトルの付け方についてレクチャーを受け、生徒たちが3日間のフィールドワークで撮影した写真の中からベストショットを1枚選んだ。そして、写真のタイトルや撮影場所について、どうしてその1枚を選んだのかなどを発表した。



図5 【発表用写真】

第7回 神山創造学 発表会に向けて(2020年7月22日)

クラス // 施設

◎イイとか

絵の国語課

正直感想評評評評評評評評評評

ふのせ

△感想、その上物なのね？（想像に描いていたこと、感じたことを）

△感想、最後の絵は「アーチをもじって描いた世界観」。しかし実際は自分で描いてる絵は2つあるよ。それは他のもので、それがちゃんと組み込んで製作している感覚を感じました。それでこの絵は、アーチをもじって描いた世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。自分で描いた絵は、自分で世界観を変えて、自分の感覚を表現するための絵だなと。

44 / 51

図 6 【発表用原稿】

[去年度との変更点]

○振り返りシート

去年度の振り返りシートは、ハートの中に体験してみての気持ちを色で表し、その説明を書くという形式だったが、今年度は、見たり、聞いたり、感じたりしたことをきちんと言葉で表現するシートへと変更した。また、明確な問い合わせ立てることで、生徒たち自身が話をまとめ安くするように工夫した。

<p>神山創造学 5月29日(水) フィールドワーク</p> <p>コース：地元の人々に会いに行く・職人に会いに行く・アートと出会う・自然に触れる・働き方を知る</p> <p>目標 …訪問先へ最初と最後に挨拶・お礼を伝える：_____</p> <p>質問 …より詳しく知るための質問をする：_____</p>	<p>クラス：_____ 氏名：_____</p> <p>【 ハートの説明 】</p> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>
--	---

図7 【去年度の振り返りシート】

第4回 神山創造学 レポート(2020年6月24日)

クラス /

①どこに行った。何を見た。どんな話を聞いた?

どこに行かれた
えんびわオフス 観光 かまパン

なにを見た?
飛行機 滑走路 コーヒー豆 バニラ
オカズ 飲食機器 二葉
カラム

どんな経験した?
仕事をやる上で 大切にしていること
仕事内容
仕事をやるきっかけ

②大人から聞かされたのは?

- ・人とのつながり
- ・コミュニケーション
- ・人の面白い
- ・暮らしとの大事さ
- ・良いこと、悪いことはつながっている。

③今日の一枚について(タイトル。なぜその一枚を選んだのか?、何が印象に残っているのか?)

タイトル

なぜその一枚を選んだのか?
「他の商店 飯は付かないけど、福島で住んでいる人が
人とのつながりをみて、今の自分があるのはすごいし。
毎日 JSKで通るから」

何が印象に残っているのか?

「JSKを見る景色と並んで見る景色は違うなと思った。」

図8 【今年度の振り返りシート】

〔成果〕

神山町内の観光名所や地域産業の働き方など神山町の今を体験するいい機会となった。また、貴重な経験と体験をすると同時に、「伝える力」「聞く力」などの基本的なスキルの重要性を実感することができた。体験したままで終わらず必ず生徒自身が体験したこと、言葉にすることで全員に体験を共有することが出来た。

b まちぐるみしごと体験

[受け入れ事業所]

- 徳島中央森林組合
- 神山椎茸販売共同組合
- えんがわ
- スキーランド
- めし処萬や山びこ
- 徳島県動物愛護管理センター
- 神山モータース
- 森の小さな美容院
- イラストレーター／高瀬尚也

[実施内容]

○事前学習【先輩の体験談を聞く】(令和2年9月1日)

2年生が夏休みに参加したインターンシップについて、参加した理由やインターンシップでの目標とその結果、印象に残っている仕事内容などについて発表した。さらに、その発表を聞いた感想や印象に残っていることをレポートにまとめた。

○事前学習【しごと体験先の決定】(令和2年9月9日)

事前のアンケートにより選定した事業所を生徒たちに提示し、各事業所の説明を行った。生徒たちには、再度自分の興味関心のある事業所を選ぶように指示を出し、事業所の中から3つ優先順位をつけて希望表を提出するようにした。

○事前学習【自己紹介カードの作成、適性診断テストの実施】(令和2年9月16日)

自己理解を深める一環として、簡単な適正診断テストを実施した。また、その結果を元に自分が感じたことをペアで発表し合った。その後、その結果を参考にしながら、体験先に渡す自己紹介カードの記入を行った。

○事前学習【電話のかけ方、日報の書き方】(令和2年9月30日)

体験先への最終確認は生徒自身が行う事になっているため、電話の応対方法をペアで確認し合った。さらに、体験中は日報を記入するため、その書き方について指導した。生徒たちは、「楽しかった」や「面白かった」など感情のボキャブラリーが少ないため、どうして楽しかったのか等、理由を必ず記入することや感情表現のためのことばを一覧にしたものを持ち、記入例などを交えて説明した。

○最終オリエンテーション(令和2年10月13日)

必要資料の確認としごと体験の目標、日報の書き方などについて最終確認を行った。

○しごと体験(令和2年10月14日・15日)

生徒たちはそれぞれの体験先に集合し、2日間のしごと体験を行った。全員大きなトラブルもなく、それぞれの体験先で有意義な活動を行った。



図9 【大和合金】



図10 【フードハブプロジェクト かまパン&ストア】



図11【神山椎茸販売共同組合】

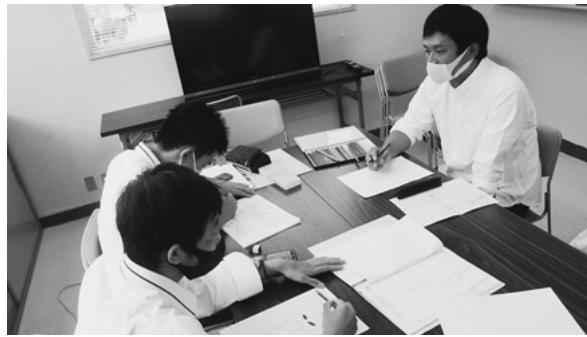


図12【イラストレーター】

○事後学習【振り返り、お礼状作成】（令和2年10月21日）

2人1組になって、しごと体験2日間について感想や印象に残っていることを発表し合う。後半は、お礼状の書き方について説明する。今回は、定型文を用いて書くか、はじめから生徒が考えて書くか選択して行うようにした。

○事後学習【発表準備】（令和2年10月28日）

生徒たちにどうして発表するのか、どうして発表を聞くのかについて考えてもらい、全体に対して発表した。また、発表の方法について説明した。発表時間10分（発表5分・質疑応答3分・評価コメントの記入2分）とし、内容は、体験先を選んだ理由や印象に残っていること、体験を通して発見した働く上で自分にとって大切なことなどについて発表原稿の作成を行った。

○事後学習【発表準備・評価方法について】（令和2年11月11日）

授業前半は、発表に向けて体験先での写真1枚から2枚選択した。後半は、評価方法について説明を行った。今回は、教員の評価とともに、生徒同士で評価を行うこととし、評価基準の説明を行った。

○体験発表（令和2年11月18日・12月2日）

生徒たちは2グループに分かれ、発表を行った。発表時間が短い生徒に対しては、教員やつなぐ公社スタッフが質問し、内容を深めていた。また、生徒からも質問が出せるように支援し、生徒間で体験を深めていくけるように支援した。

〔去年度との変更点〕

○先輩からの体験談を聞くときのワークシートや発表方法

去年度は、2グループに分かれ、先輩が移動し、それぞれで発表を行ったが、今年度は、全員で先輩の話を聞くようにした。さらに、今回体験談を報告してくれた2年生たちは、去年、神山創造学で大勢の前での発表や自分の考えを言葉にする練習を十分に行えていることから、去年度以上に内容の濃い発表を行ってくれた。ワークシートでは、具体的な項目で、話の内容をメモできるようにし、後で、見直しができるようにするとともに、教員側が生徒の理解度を確認できるように工夫した。

○日報の書式

生徒たちは、感情を表すときに「楽しかった」「面白かった」「辛かった」など単純な表現を使うことが多いが、感情表現には様々な言葉があり、それを自分の表現に利用できれば、発表や感想文などで幅広く利用できると考えた。そのため、日報に感情を記入する欄を設け、「感情表現のためのことば」を一覧にして生徒たちに提示した。従来通り、単純な表現を使用する生徒が多かったが、生徒のボキャブラリーを増やすことにつながったと思う。

○2人1組での発表練習

去年度の生徒から違うグループの発表も聞きたいという意見がいくつかあったため、今年度は、発表練習をする時間として違うグループの生徒に対する発表を行った。本番に向けての練習になるとともに、相手からコメントをもらうことで、発表内容の改善と生徒の自信につながつ

ていた。

〔成果〕

生徒は、興味関心の高い事業所を選ぶことが出来たため、主体的に活動に取り組むことが出来ていた。また、事前学習の時間をしっかりと取ったことで、体験をする意義や目的を意識できていたように思う。事後学習でも、発表原稿の作成やペアワークによって体験を何度も言語化することで、しごと体験での経験を自分のものにできていたように思う。

c 聞き書き（神山の名人に会いに行く）

〔訪問先〕

- 農業【白桃茂さん】 ○林業【栗飯原勝芳さん】 ○食文化【栗飯原育子さん】
○神山の今と過去【杉本哲男さん】 ○獵師【相原英夫さん】

〔実施内容〕

○事前学習（令和3年1月20日）

去年、聞き書き甲子園を体験した2年生の井口さんから「聞き書き」という取り組みについて、コツや準備、聞き書きを経て成長したことなど、インタビュー形式で体験談を聞いた。また、グループごとで、井口さんに対する質問や感想を考え、それを聞いたり、伝えたりする活動を行った。それぞれのグループからは、「質問はたくさん準備しましたか」「沈黙の時間はどうしたらいいですか」など、多くの質問が寄せられた。



図13【インタビューの様子①】



図14【インタビューの様子②】

○事前学習（令和3年1月27日）

聞き書きグループに分かれ、質問や訪問先での役割分担や録音方法の確認を行った。また、事前資料のあるグループについてはそれの確認を行った。

○聞き書き（令和3年2月3日）

グループごとに名人のもとを訪れ、1時間半ほどお話を伺った。事前準備していた質問だけでなく、お話を伺う中で、疑問に思ったことを質問し、有意義な時間を過ごした。インタビューが終わった後は、話を聞いて印象に残ったことやもう少し聞いてみたいことなど深める作業をするための準備を行った。



図15【神山の今と過去】



図16【獵師】

○文字起こし（令和3年2月3日～2月16日）

各グループ、スマートフォンやパソコンを利用し、文字起こしを行った。

○事後学習～深める時間～（令和3年2月17日・24日・3月3日）

文字起こしした原稿をグループごとに読み込み、疑問を持ったところや印象に残った言葉などについて意見を出し合い、名人の話を整理していった。話の中からグループで「深める」キーワードを決め、それについて、本やインターネットで調べたり、再インタビューを実施したりした。そのことも共有の際には、報告するため、グループごとに模造紙やパワーポイントを利用し、発表の準備を行った。



図17【まとめの様子／神山の今と過去】

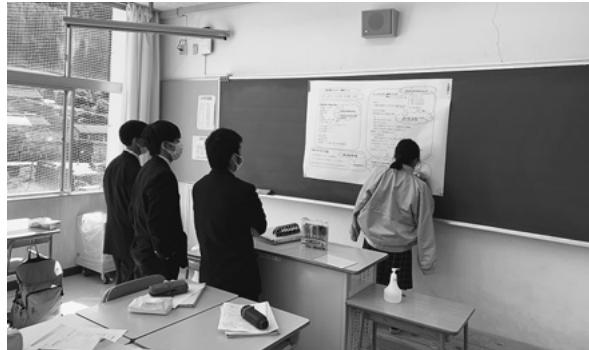


図18【まとめの様子／農業】



図19【まとめの様子／食文化A】



図20【まとめの様子／食文化B】

○共有（令和3年3月3日）

グループごとに聞いた内容や深めた内容について発表し、他のグループと体験を共有した。

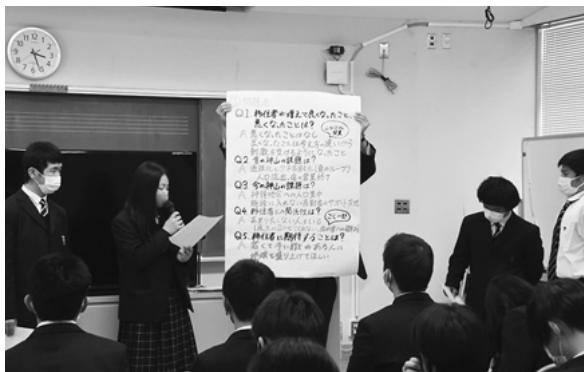


図21【発表の様子／神山の今と過去】



図22【発表の様子／林業】

○振り返り（令和3年3月4日）

昨日の各グループの発表を聞き、感じたことや考えたことなどをグループごとに振り返った。また、名人へのお礼方法については、写真に寄せ書きをしたり、メッセージカードを使用したりと各グループでの話し合いにより決定した。さらに、今回は再訪問し、お礼を生徒が直接伝

える時間も設定するなどグループごとに話し合った。



図23 【メッセージ制作／農業】



図24 【メッセージ制作／食文化】

[去年度との変更点]

○発表内容

去年度は、聞いた情報をまとめ、発表することがメインになっていたが、今年度は、聞いた内容から深めたい項目を選びそれについての説明も行った。

○お礼と再訪問

お礼をどのように行うのかということや再訪問するかしないかなど最後の仕上げの部分をグループごとに話し合わせ、決定させた。これは、生徒たちからの振り返りで「形にはめ込まず自由にしたい」という意見を採用した。グループごとに考えて実行することができていた。

[成果]

興味関心の高い分野の聞き書きを行ったことで、積極的に質問し、真剣に話を聞く姿が見られた。一方的にインタビューするというよりは、会話を楽しんでいるグループもあり、祖父母世代との交流は、コミュニケーション力向上にも、なっていたように思う。また、文字起こしすることで、話の内容を深化させる結果となり、その後のまとめに大いに役立った。

② 評価方法

神山創造学では、期末考査で振り返りという形でテストを実施し、自己評価と作文を主軸とし、それを補う形で他者評価を加算し、成績評価を行っている。生徒からの意見として、基準が分からないとどう行動していいのかわかりにくいという意見もあり、今年度は、評価項目を生徒に事前に説明し、日々の授業で意識して活動できるように変更を行った。

③ 全体を通して

神山校ではこのように、神山町全体を教室と見立てて授業を展開している。様々な体験の場を設定することで、生徒たちが感じたことや考えたことを言語化し、相手に伝える力や、相手の体験を受け止める力など社会で生活していく中で必要な基本的な能力を育むことができている。もちろん、個人差はあるが、3年生になる頃には、グループで話し合いや人前で発表するなど自分の意見を表現する場面で主体的に取り組める生徒が多く、神山創造学での成果が伺える。

入学時には、自己肯定感の低い生徒も多いが、地域の大人と関わり、活動していく中で自信を持って様々な活動に取り組み始める生徒も現れてきた。これからもこの授業を継続し、生徒たちの成長に役立てていきたいと考えている。

1年生神山創造学 2学期振り返り

④ペアワーク【協働する】

	A(8点)	B(6点)	C(4点)	D(2点)
相手によって発表・ペアワークの際、話しゃべくなる工夫、思考が深まるように質問を投げかけた。 A+B+Cを選んだ場合は、具体的な内容を記入	発表・ペアワークの際、話しゃべくなる工夫、思考が深まるように質問を投げかけた。	話しやすくなる工夫、思考が深まるように質問を投げかけた。	話しやすくなる工夫、思考が深まるように質問を投げかけた。	工夫も質問もしなかった。

「どんな仕事をしているか？」 「どんな風にいきていこうか？」 を決めるることは考えたからと書いて、すぐに結論が出来るではありません。かく言う、僕自身も30後半になった今でも、迷ながら考え続けている状況です。

このしごと体験がきっかけとなり、自分の将来を真剣に考え始めて、行動に移す人が少しでも増えると嬉しいなと思っています。

梅田 學

(1) ①～⑤の項目を読んで、A～Dのうち自分に当てはまると思うアルファベットに丸を入れてください。
A+B+Cを選んだ場合は、具体的な内容を記入してください。（合計 52点）

①事前準備【伝える力】

	A(8点)	B(6点)	C(4点)	D(2点)
発表のために、しっかりと台本・まとめて作成し、練習をして当日に臨んだ。	十分ではないが、発表のたびに台本・まとめて作成し、練習をして当日に臨んだ。	授業中に出された、発表に向けたの項目は書いた。	ほとんど発表のための準備をしなかった。	ほとんど発表のための準備をしなかった。

②プレゼン【深める力】

	A(8点)	B(6点)	C(4点)	D(2点)
仲間の発言・発表を聞いて、自分にあてはめて考えて、次にどんな行動をとろうかを考えた。	仲間の発言・発表を聞いて、自分にあてはめて考えて、次にどんな行動をとろうかと考えた。	仲間の発言・発表を聞いて、自分にあてはめて考えた。	自分ごととしてはどうかなかった。	自分ごととしてはどうかなかった。

A+B+Cを選んだ場合は、具体的な内容を記入

具体的な内容で理解ができる（3点）

具体的な内容ではないが理解できる（1点）

記入なし（0点）

⑤他の理解【協働する】

	A(8点)	B(6点)	C(4点)	D(2点)
授業中の他の者の言動を通じて、仲間の新たな一面（好み、得意不得意、個性）を見て、仲間の新たな一面を具体的に見つけた。	授業中の他の者の言動を通じて、仲間の新たな一面（好み、得意不得意、個性）を見て、仲間の新たな一面を具体的に見つけた。	授業中の他の者の言動を通じて、仲間の新たな一面（好み、得意不得意、個性）を見て、仲間の新たな一面を具体的に見つけた。	授業中の他の者の言動を通じて、仲間の新たな一面（好み、得意不得意、個性）を見て、仲間の新たな一面を具体的に見つけた。	件間の新たな一面を発見できなかつた。

A+B+Cを選んだ場合は、具体的な内容を記入

具体的な内容で理解ができる（3点）
具体的な内容ではないが理解できる（1点）
記入なし（0点）

	A(8点)	B(6点)	C(4点)	D(2点)
A【自分の言葉で表現する】 自分および相手の感情や思考を言葉にしているか	・言葉が断片的で第三者から理解可能な表現になっていない ない	・具体的な経験に欠け、漠然とした表現が表現される	・具体的な経験に欠け、漠然と自身の感情や思考が表現されている	・具体的な経験を描写し、論理的に質問がなく、第三者が理解するための表現で書かれている
B【社会との関連性を発見する】 体験から社会とのつながりや教訓を学び取っているか	・体験から何を学んだかが表現されていない	・体験から何を言葉にしているが、漠然とした表現に留まっている	・体験から社会とのつながりや教訓を学び取っている	・体験を経て次に取り組みたことや知識に繋がるところがある
C【学びの意欲へつなげる】 体験が学びの意欲につながっているか	・次に取り組みたいことや知識	・体験を経て次に取り組みたことや知識に繋がるところある	・何をしたらいかは分から	ない

具体的な内容で理解ができる（3点）

具体的な内容ではないが理解できる（1点）

記入なし（0点）

(2) 神山創造学Ⅱの取り組み

① 取り組みの概要

地域創生類2年生では、神山町内の聞き取り調査やフィールドワークを通じて、その歴史・文化・暮らし・農産業などについて調査を行い、里山の景観や中山間地域における農業生産をはじめとする町内の現状や様々な課題について理解を深めている。地方創生戦略のビジョンを掲げている地域の将来を見据えた施策を行う行政や地域住民らと協働して、その諸課題解決に向けてプロジェクト学習に取り組むことを学習目標としている。

【単位数及びプロジェクトの内容と担当】

単位数（4単位）

神山創造学ⅡA（環境系21HR=16名）火曜日5限・6限
まめのくぼ担当（丸山・中西）耕作放棄地の水路や石積みの修復

神山創造学ⅡB（食農系22HR=13名）火曜日4限・5限
まめのくぼ担当（細川・池田・樋口）神山小麦の栽培から加工

神山創造学ⅡAB（チームプロジェクト）金曜日 5限・6限
①国際交流（富永） ②池の掃除（細川） ③神農祭（秋山）
④学校ピーアール（池田・梅田） ⑤大久保いちょう祭り（丸山）

【まめのくぼプロジェクト（環境系）】

まめのくぼとは、神山町谷地区にある旧の水田地帯で、石積みの稻田で形成された土地で少子高齢化が進み管理を行う農家がいなくなり、耕作放棄されている地名のことをまめのくぼと地域の住民は名付けている。昨年度から豊作放棄地まめのくぼで神山校は神山小麦の栽培と水田を畑に修復していく環境整備を行ってきた。長年放置された畑は外来種の雑草が生え、石積みは獣害や自然災害で崩れ水路もその機能を失っていた。環境系ではこの様な状況を改善するため、まめのくぼ周辺の道路の除草作業・石積み修復作業・水路の修繕作業・鳥獣害対策を、地域創生類環境デザインコース16名がまめのくぼプロジェクト環境系として1年間計画を立て取り組んできた。

【まめのくぼプロジェクト（食農系）】

地域創生類食農プロデュースコース13名は、地元の種苗を継続栽培させる目的のシードバンクを学びの柱として、昨年度より神山小麦とソバの栽培から収穫・加工・商品開発に取り組んできた。現在、地元食品販売企業「フードハブプロジェクト」の社会人講師と連携を図り商品開発から販売に向け、6次産業化の達成へのゴールをめざし地域と協働しながら実践的な学びを行っている。なお、詳しい活動内容や成果並びに今後と展望については本報告3「地域の生産・交流拠点の創出」並びに4「地域を学びの場とした実践」で詳しく報告する。

【チームプロジェクト】

本年度のチームプロジェクトは、大きく3つのテーマを設け設定した。

- 1) 設定したテーマから課題を抽出し、解決策を考え実践する機会を持つこと。
- 2) チームプロジェクトの進め方を実践的に学べること。
- 3) 課題探求の過程で、地域でのヒアリングやプロのアドバイスを受けること。

チームプロジェクトの概要として、事前に生徒から希望を取り大筋のプロジェクトから選び取り組んでいく。「テーマ」や「目的」の方向性は指示されるが、方法は指示しない。正解のない

課題に対してチームで最適解を考え取り組むという経験を経て、3年生の課題研究の活動につなげる。チームの構成については環境デザインコースと食農プロデュースコースコースの混合で人数はテーマ毎で大きなばらつきが出ないようにする。テーマ毎のチームが決まれば、担当教員または社会人講師（神山つなぐ公社）を配置し、地域や生徒会の連携をサポートしていただき参画計画しプロジェクトの指導に当たる。報告について、1学期は7月に中間報告を2月に最終報告会を1年生に向けて行う。

今年度行うチームプロジェクトは以下の5つのグループに分けることになった。

a 神農祭プロジェクト

神山校の神農祭を盛り上げる企画や改善案を考え、生徒会の神農祭実行委員会へ提案し実行する。昨年度は、前々昼夜祭を開催しイノシシ鍋を全校生徒に振る舞った。地域の人たちから食材を集め0円鍋の昼食会を実施した。

b 国際交流プロジェクト

オランダの高校生とオンラインでできる交流会を考え、実行する。その活動をまとめ神農祭で発表報告する。昨年度は受入プログラムの企画や日本食づくりのワークショップを行った。

c 池の掃除プロジェクト

神山校の中庭にある卒業記念庭園の清掃を行う。生殖している生物の保護や水質浄化を目的とした作業を学校のために行う。

d 神山大久保乳いちょう祭りプロジェクト

神山町神領字中津にある大久保集落が毎年実施しているいちょう祭りを盛り上げる企画で、主催者であり実行委員会のメンバーに企画を提案し、お祭りまでの準備を協力して行い当日も参加して祭りを盛り上げる。

e 神山校 PR プロジェクト

神山校のホームページを生徒の視点で紹介したり、PR用の動画を作りその動画で生徒募集を行うなど、学校の行事や職員を紹介し分かりやすい紹介にするプロジェクトである。

② 取り組んだこと

〔まめのくぼプロジェクト〕環境系

a 4月1日昨年度播いた小麦が30cm程度成長した。

生徒たちは臨時休校のため教職員がまめのくぼの小麦畑を除草している様子。畑の周りには電柵を設置している。シカが新芽を食害するから。（図1）



（図1）

b 5月露の影響で神山も定期的に雨が降り、小麦畑

に水がたまる。旧の水田は災害で崩れ水路が機能を果たさず排水ができず水がたまっている状態が続いた。このままでは小麦が病気になり枯れてしまう。（図2）



（図2）

- c 6月23日環境コース16名が石積み施工を開始した。2チームに分かれAチームは石積み用の石と石の裏にしく栗石を搬出する。Bチームはまめのくぼの石積みの修復作業を行う。高さ1m、幅30mの旧の水田畠の石積みを修復している様子。(図3)



(図3)

- d 10月27日環境コース石積みチームが3分の2の工事を完成した。しかし問題発生、予定していた石積み用の材料が底をつき、追加で石を運搬しなければ、残りの3分の1が完成しない。なんとか今年度中に仕上げたい。残りの工事区間を確認している様子。(図4)



(図4)

- e 11月24日環境コース水路補修チームは、5月に小麥畠が水につかったので、旧水田用の水路を人力で修繕している様子で、ある程度水が流れてくれることを願うしかない。(図5)



(図5)

- f 12月27日新しく開拓した畠にシカがやってきた。種をまいて1ヶ月で柔らかい新芽をシカが食害していたので杉の支柱を立て、4mに切った竹を4段に重ね針金でしっかりと固定した。後はシカが近寄らないように電柵ワイヤーを張るだけ。(図6)



(図6)

〔まめのくぼプロジェクト〕食農系

- a 6月9日まめのくぼプロジェクト食農コースが神山小麦の収穫を始めた。機械で種をまきシカの食害や水路の水の反乱で被害があったけどなんとか収穫時期を迎えた。収穫は手刈りで脱穀は機械で行う。その後はブルーシートを敷きその上で乾燥させていく。



(図7)

b 9月14日小麦の収穫の後、地域の方にソバの実を分けて頂き、手作業で播いている様子。9月に入つて余り雨が降らなかったことと、肥料も適宜に与えなかつたことが重なつて思った量の収穫はできなかつた。この経験は来年度のまめのくぼプロジェクト栽培に生かすこととなつた。



(図8)

e 11月2期目の神山小麦を手巻きで播いている様子。前回は機械で種まきを実施したが、今回は手で丁寧に播いた。播種作業後は電柵設置と竹で柵を設置した。前回は約50kg程度の収穫しかできなかつた。今回は倍の100kgの収穫量を目指している。(図9)



(図9)

f 2月収穫した神山小麦で商品開発づくり。パンとクッキーを試作で作った。試食アンケートを取り商品開発の改善に努める様子。



(図10)



(図11)

[国際交流プロジェクト]

神山町が毎年実施している国際交流プロジェクトは本年度コロナウイルス感染拡大のため、国外との交流が困難な状況となり、オンラインで高校生との交流を行うこととなつた。初めに、何をオンラインでどうやるかチームで話し合い神山の特産品で記念品を作りオランダの高校生にお土産として贈ることとした。記念品は、町産材ヒノキで割り箸を作り、その割り箸に「Pieter Groen2020」「Kamiyama2020」とレーザー刻印で印刷し完成させた。11月に実施したオンライン交流会では記念品のお土産で贈った割り箸で豆をつかむワークショップを行い大いに盛り上がつた。次年度本格的な交流ができることを願う。(図12)



(図12)

[神農祭プロジェクト]

本年度の神農祭は、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となりました。その代わりに同11月に文化祭・体育祭を生徒会メンバーと企画し学校行事を盛り上げるというコンセプトでプロジェクトが始まりました。例年であれば地域の方や日ごろ学校の行事やイベントでお世話になっている関係者・卒業生・保護者を招待するが今年は一切呼ばず非公開で実施する文化祭となつた。プロジェク

トチームは文化祭を盛り上げるために阿波踊りの動画や、バンドを構成しミニコンサートや、学年対抗のパフォーマンス大会やファッションショーなど全校生徒で盛り上げる企画や日程を考えた。体育祭も天候に恵まれ肌寒いともなく少人数ならではのアイデアが盛り込まれた種目で盛り上がった。

〔池の掃除プロジェクト〕

本校創立30周年記念で作庭された青石の築山式庭園の池の清掃を行うプロジェクト。池には日本鯉が数十匹泳いでいる。しかし排水溝が砂やコケその他不純物で詰まっているその部分を修復し、池を優雅に泳ぐ鯉を鑑賞できるよう清掃する。ところが、排水溝を修復するには池を1回壊し石組から行い、コンクリートを敷き直さなければならず高額の費用と工事期間がかかることが判明。チームは今できることを考えた。それは、濁っている水を循環させ水の透明感を取り戻す装置を手作りでこしらえるということ。「池の水循環ろ過装置」はコンテナーに川砂・砂利・栗石でろ過槽をこしらえ汚れた水をきれいにする。循環器は水中ポンプで池の水を循環させた。



(図13)



(図14)

〔神山大久保乳いちょう祭りプロジェクト〕

神山町神領中津の大久保集落にそびえ立つ樹齢500年以上のいちはうは、樹周13メートル、樹高38メートルの巨木で、大久保集落の里を見守るかのようにそびえ立っている。かつては、幼な児の健やかな成長を祈る母が、枝から垂れ下がる乳房のような「気根」に祈願の布を結び、豊かな乳の出を願ったといわれていることが、乳いちはうと呼ばれる由縁である。夜にはライトアップもあり、闇の中に浮かび上がる黄金色の巨木が幻想的に浮かび上がる。毎年11月23日（祝）には黄金色に輝くいちはうの木の下で「大久保いちはう祭り」が開催される。その祭りを地元の人と協力して盛り上げるため、このコンセプトを企画した。地元の方の手作りのお団子や日本そばの出店もあり、巨木の下に広がる棚田を眺め、遠くに聞こえる水車小屋の音を聞きながら、祭りを体感してもらう。しかし、コロナの影響で本年度は中止となり、残念ながら目的を途中で変更せざる得なくなつた。目的を祭りのロゴ制作と子ども達が楽しく遊べるワークショップの2つにした。ロゴは全校生徒に募集し優秀な作品を大久保いちはう祭りの実行委員会にプレゼンし決定した。ワークショップは折り紙で金魚を作り磁石で釣り、景品が当たるゲームを企画し、神山温泉道の駅で実演し、好評だった。



(図15)

〔神山校ピーアールプロジェクト〕

このチームは、一つ動画を作成し文化祭で全校生徒に鑑賞してもらう。2つ目はその動画を地域や保護者の方に鑑賞していただき学校での取り組みや活動を理解してもらう。3つ目に、ホームページなどのURSに掲載し中学生の募集に活用する。この3つがコンセプトで1年間活動した。動画を作成するにあたり神山町にサテライトオフィスを設置している株式会社えんがわのスタッフにスマホで簡単にできる動画やショートムービーの作成手順など本格的な編集機材を借りて念入りに動

画を作成した。プロジェクトの終わりにチーム全員でふりかえった内容は、他人に相談せず個人個人が勝手に動画撮影を進めチーム全員が共通理解できず何を行っているかが把握できないまま進んでいたこと。もっと報告・連絡・相談をしっかりやろうと話し合った。2つ目は、チーム全員の役割分担ができるおらず何もしないメンバーもいてチームプロジェクトになってなかつた。3つ目に動画の見せ方をもっと勉強・研究しホームページアップに向け改善していく必要があること。今後、これらを修正し完成させることが最終ゴールとなる。(図16)



(図16)

③ 取り組みの成果

このまめのくぼ環境系、まめのくぼ食農系の2つと、チームプロジェクト5本の最終報告会を2月25日に1年生に向けて実施した。目的は、次年度チームプロジェクトを行う見本となり、取り組み方や活動内容を決定し、計画性のある神山創造学につなげることとなった。

成果1) チームプロジェクトでは4～6名のチームで5つのプロジェクトに取り組んだ。動画を作成したチーム、文化祭を企画運営したチーム、オンラインで国際交流したチーム、水の浄化循環を考えたチーム、募集用のホームページを作成したチーム、地域の祭りを盛り上げるアイデアを考えたチームと、生徒たちは自分の役割を決め報告や相談連絡しあうことが大事と感じてくれたことが成果といえる。

成果2) まめのくぼプロジェクトやチームプロジェクトで専門家や地域の意見を聞きインタビューしていく場面が多く見れた。聞きたいことを確実に聞き自分たちのプロジェクトに生かしていく他者との協働性が身に付いたことも成果の一つに挙げたい。

成果3) 生徒たちの活動のふりかえりのコメントで「今日の作業の内容を説明してほしい」「食品の開発で必要なレシピはどう作るのだろう」「アンケートの意見が反映されていない」「人前で発表するのが苦手だったけど声を出して伝えれるようになった」など様々な意見が出て各プロジェクトチームが目標に向かってP(計画)・D(実行)・C(評価)・A(改善)のPDCAサイクルができていたことが良かった。

成果4) 地元や地域の人が神山校の活動に関して興味や関心を持っていること。「高校生が町内を歩いているだけで町がにぎやかになる」「使われていない地区が整備され景観が変わった姿を見て驚いた」「ありがとう。がんばって。期待している。」など高校生を励ます声掛けが場面場面で行われ、高校生に期待されていることが今回の神山創造学Ⅱのプロジェクト学習で伝わった。

④ 評価方法

今年度よりループリック評価法について全職員が研修を行い、神山創造学Ⅱの学期末考査において生徒に事前説明し、下表の評価基準で採点を行った。(表1)

3学期の学期末考査のレポートの評価はA「自分のことばで表現する」B「社会との関係生を表現する」「学びの意欲へつなげる」を3つのレベルに分け自己評価と担当教員の評価を実施した。(表2)

1年間のコースプロジェクトとチームプロジェクトの最終報告会を令和2年2月25日に実施した。参加した1年生及び2年生並びに担当教員より評価シートを取り学年末考査の評価に加えることとした。(表3)

2020年度3学期 神山創造学 [チーム/コース プロジェクト]

点数配分と評価の観点

- (1) 振り返り [自己評価] 40点満点(チーム20点/コース20点)
- (2) レポート (全体) 30点満点
- (3) プレゼン (チームPJ他者評価) . . . 20点満点
- (4) 出席点 10点満点(チーム5点/コース 5点)

(1) 振り返り . . . 各20点

- ①~④の選択肢
A : 5点 B : 3点 C : 2点 D : 1点

(2) レポート . . . 30点

- 以下のループリックをもとに点数をつける。
※ 漢字や送り仮名の間違いは減点対象にしない。

	レベル1 (4)	レベル2 (7)	レベル3 (10)
A【自分の言葉で表現する】	言葉が断片的であり、感情や思考に関する表現が乏しい。	漠然とした表現にとどまっているが、自身の感情や思考が表現されている。	具体的な経験を描写し、論理に飛躍がなく、第三者が読んで説得力のある表現で書かれている。
B【社会との関連性を見出す】	体験の記述はあるが、そこから何を学んだかの記述が乏しい。	体験から学びを言葉にしているが、漠然とした表現にとどまっている。	体験から社会とのつながりや気づきを得て、応用できる教訓にまで表現できている。
C【学びの意欲へつなげる】	次に取り組みたいことや知りたいことが表現されていない。	具体的な記述には至っていないが、体験を経て次に取り組みたいことや知りたいことが漠然とある。	体験を経て次に取り組みたいことや知りたいこと、それらに対して何をするべきか記述されている。

(3) 最終報告プレゼンの評価 . . . 20点

- 4つの観点
S : 5点 A : 3点 B : 2点 C : 1点

(4) 出席点 . . . 各5点

最終調整

生徒の自己評価に対して、他者目線での評価を加えることで調整を行う。

調整の根拠は選択肢A~Dに準拠すること。

例)

②の設問で、本人はD評価をつけているが、時折発言していたのでCに変更 (+2点) など

(表1 神山創造学3学期学年末考査採点基準)

クラス()番号()氏名()

2年生 神山創造学 振り返り[チーム/コース/プロジェクト]

2年生で進めてきたチーム/コース(まめのくぼ)プロジェクトを振り返りましょう。
自分が興味や関心を持つもの、楽しんだなど感じるもの、疑問に思ったことを、3年生の課題研究でさらに深めていくといいですね。

(1)自分自身に關する1年間の振り返り

①~④の項目それぞれについて、A~Dのうち自分に当てはまると思うアルファベットを各授業の()の中に書きましょう。

①チーム/コースの活動への貢献【協働する力】

チーム()/コース()

A	B	C	D
プロジェクトに必要な作業を参考して、役割分担を決めて、自分のやるべきことを積極的に実行した。	自分にできることを見つけ、積極的に立候補して作業を行った。	自分に分担された作業や役割は引き受けなかった。	役割や分担を引き受けなかった。

②チーム/コースの仲間へのサポート【協働する力】

チーム()/コース()

A	B	C	D
全体の作業の進み具合や仲間の様子を見て、自分ができる手助けをした。	仲間が手助けを必要としていることが明確な時は協力した。	仲間の手助けはほとんどしなかった。	仲間が手助けを必要としているかどうか分からなかった。

③チーム/コースでの話し合い【伝える力/話す】

チーム()/コース()

A	B	C	D
全体の話し合いを進展させることを意識しながら、自分の意見やアイデアを積極的に伝ええた。	仲間に、自分の感じていることや考えたことを積極的に伝えた。	意見を求められた時には自分の考えを伝えた。	ほとんど話し合いに参加しなかった。

④チーム/コースでの話し合い【伝える力/聞く】

チーム()/コース()

A	B	C	D
仲間の発言に関連づけて発言したり、アイデアを出したり、質問を投げかけたりなど、その場の話し合いを深めることに貢献した。	仲間の発言に対して理解を示したり、意見を出すなど、テーマに沿った話し合いを進める雰囲気をついた。	仲間の発言は聞いていた。	仲間の発言にはほとんど意識を向けず、聞いていなかった。

(2)自分自身の振り返り[深める力]

①特に力を入れて取り組んできた活動にチェック(✓)を入れましょう(複数可)。

□環境デザインコース

()石積()石積み()草刈り()水路調査()水路の整備()柵(さく)の設置()穴掘り()中間発表プレゼン()最終報告プレゼン()その他()

□食農プロジェクトコース

()草刈り()の整備()中間発表プレゼン()最終報告プレゼン()小麦の播種(はる)()柵(さく)づくり()穴掘り()城西高校本校見学・報告()小麦の製粉()小麦を使った調理()すだちの収穫(じゅうかく)()その他()

□チームプロジェクト

チーム名()
()話し合いのまとめ役()話し合いでのアイデア出し()授業ごとの報告()中間発表プレゼン()最終報告プレゼン()地域の方へのプレゼン()原稿作成()計画・段取り()企画実施()クイズ・出・物作成()道の駅での販売()池の掃除()ろ過装置の製作()地域の方との交渉()地域の方への報告()動画撮影()動画集()オンライン国際交流()プレゼント制作()その他()

②「3年生の課題研究でやってみたいこと」とその理由を書きましょう。「深めたいこと」や「新たに出てきた疑問」「もっと知りたいこと」など、2年生の創造学で体験したことなど、具体的な体験とあわせて書けるといいですね。

▶2年生神山創造学【回答用紙】へ

◀書く時のヒント
●具体的な体験(印象に残った/深めたいと思った/疑問を感じた)と、それについての自分の考え方や気持ちを書いてみよう。

●体験を通して、自分や自分が関わるものごとはどんな影響を受けただろうか。

○思ふところを書いてみよう。

●様々な体験を経て、次に取り組みたいことや知りたいこと、それらに対して自分が何をするべきか、したいのかを書いてみよう。

(表2 神山創造学3学期学年末考査)

2年生神山創造学 チームプロジェクト

最終報告感想・評価シート

名前 _____

まめのくぼ

- 1) 食農プロデュースコース
よかった点・印象に残った点

- 2) まめのくぼ 環境デザインコース
よかった点・印象に残った点

チームプロジェクト

1) 大久保いちょう祭りチーム

S特別よくできている(120点) Aよくできている(90点) Bまあまあできている(70点) Cあまりできていない(50点)	
評価軸	詳細内容
伝え方	顔の表情が見え、聞き取りやすい声の大きさ、滑舌、スピードで話していたか S・A・B・C
スライドの見せ方	文字の大きさ、量が適正であり、話の内容にあった写真やイラストがあったか S・A・B・C
テーマ・エピソードのわかりやすさ	チームプロジェクトで学んだことが具体的に話され、理解できたか S・A・B・C
質問の対応	質問者に対し、明確に答えられ、回答者が1人に偏らず、複数人で対応していたか S・A・B・C

よかった点・印象に残った点

池整備チーム

評価軸	詳細内容	評価
伝え方	顔の表情が見え、聞き取りやすい声の大きさ、滑舌、スピードで話していたか S・A・B・C	S・A・B・C
スライドの見せ方	文字の大きさ、量が適正であり、話の内容にあった写真やイラストがあったか S・A・B・C	S・A・B・C
テーマ・エピソードのわかりやすさ	チームプロジェクトで学んだことが具体的に話され、理解できたか S・A・B・C	S・A・B・C
質問の対応	質問者に対し、明確に答えられ、回答者が1人に偏らず、複数人で対応していたか S・A・B・C	S・A・B・C

よかった点・印象に残った点

5) 國際交流チーム

評価軸	詳細内容	評価
伝え方	顔の表情が見え、聞き取りやすい声の大きさ、滑舌、スピードで話していたか S・A・B・C	S・A・B・C
スライドの見せ方	文字の大きさ、量が適正であり、話の内容にあった写真やイラストがあったか S・A・B・C	S・A・B・C
テーマ・エピソードのわかりやすさ	チームプロジェクトで学んだことが具体的に話され、理解できたか S・A・B・C	S・A・B・C
質問の対応	質問者に対し、明確に答えられ、回答者が1人に偏らず、複数人で対応していたか S・A・B・C	S・A・B・C

よかった点・印象に残った点

2年生神山創造学 チームプロジェクト

最終報告感想・評価シート

3) 神農祭チーム

S特別よくできている Aよくできている
Bまあまあできている Cあまりできていない

評価軸	詳細内容	評価
伝え方	顔の表情が見え、聞き取りやすい声の大きさ、滑舌、スピードで話していたか S・A・B・C	S・A・B・C
スライドの見せ方	文字の大きさ、量が適正であり、話の内容にあった写真やイラストがあったか S・A・B・C	S・A・B・C
テーマ・エピソードのわかりやすさ	チームプロジェクトで学んだことが具体的に話され、理解できたか S・A・B・C	S・A・B・C
質問の対応	質問者に対し、明確に答えられ、回答者が1人に偏らず、複数人で対応していたか S・A・B・C	S・A・B・C

よかった点・印象に残った点

(表3 神山創造学Ⅱの最終報告会 評価シート)

⑤ 今後取り組むべきこと

(案1) まめのくぼ環境は、森林環境の有効利用で神山森林ビジョンと連携が図れる企画を生徒たちと考えていく。

(案2) まめのくぼ食農は、耕作放棄地での小麦の栽培を説明した副読本を作り、販売しその収入で耕作放棄地の整備や作物に必要な資材を購入していく。

(案3) 国際交流プロジェクトは、実際にオランダ訪問しホームステイを行いオランダの文化を学び交流を深め、受け入れの時にはオランダにないプログラムやワークショップを考え日本に来てよかったですと思われる企画を作っていく。

(案4) 神農祭チームは、今回企画した内容をさらに進化させその時の時代にあったイベントを作っていく。

(案5) その他のチーム共通で、地域連携が神山校の特色ある活動でその柱となってきているのが神山創造学や課題研究であり、生徒に身に付けさせたい探求的まなびの時間でもある。この活動をさらに検討し、さらなる成果を目指したい。

(3) 課題研究への接続

① 目的

1、2年次の神山創造学での学びを生かして、3年次の課題研究に取り組むことを期待して教育課程が組まれている。生徒の認識としても教員の意識としても両科目がつながることを目指して、課題研究の取組を研究する。

② 対象生徒

造園土木科・生活科3年生26名

③ 実施内容

はじめに、神山創造学では「伝える」「協働する」「深める」力を身につけるための教育活動に取り組んできた。課題研究への接続として「深める」ことに重点を置いて議論してきた。生徒は何を深めるのか？それは、技術だったり、地域との関わりだったり、自分自身を見つめ進路に関連づける、それぞれの課題に向き合い「深める」ことになった。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、4月から5月にかけて休校になった。神山つなぐ公社の担当者と教職員が連携しながら、手さぐりでLINEオープンチャットやZoomでオンライン授業を試みた。

課題研究は、とくに課題の設定が大切である。課題設定には時間をかけてじっくりと決めていかないといけない。生徒は休校中に調べることやどうしたらよいかアドバイスをもらい、他の人はこんなことをしているという刺激をもらったりしていた様子であった。なかなか課題研究のイメージができないので、とりあえず、今できることとして、新型コロナウイルスについて調べるという生徒もいた。



オンライン授業の様子



課題設定の共有

学校が再開して、実際に課題研究に向き合う中で、これはできる、これはできないというものが分かってきた。調査、研究、作品製作等に苦戦し、生徒はそれぞれの問題点にぶつかっていった。課題研究の授業では、「お互いに共有する」ことを心掛けている。これは、神山創造学からの学びで身につけたものである。生徒たちからの意見やアドバイスをもらうことで、これからすすめていく課題研究の内容の参考になり、また、現時点で振り返ることで考えるきっかけにもなっている。

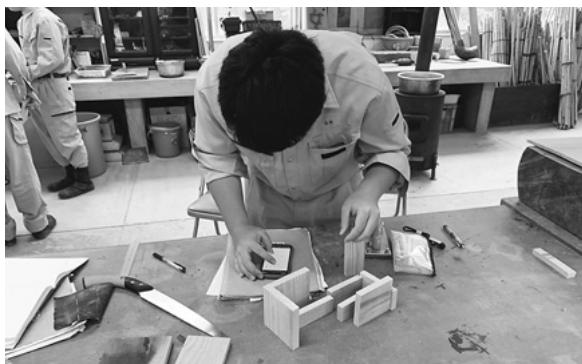
ここで課題研究の内容を一部紹介する。

神山町の祭りについて調べるグループで、七夕祭りの実行委員の方からの話をまとめた。自分で調べても分からぬことが多いので、「人にきいてみたら？」というアドバイスを受けて、話を聞きに行くことにした。これは、1年次の神山創造学で学んだ「聞き書き」という手法を取り入れている。

神山杉を使って木工製作するグループがいくつかあり、子ども用のおもちゃ、棚や収納ボックス、戦艦長門の模型、廃材を使ってスピーカーなど作品作りに取り組んでいた。とくに、スピーカー作りは販売を目的にしていたところもあって、試行錯誤しながら改良していき、数多く作製したが、最終的にお金儲けというより、誰かに喜んでもらうという感情が強くなり、同級生にプレゼントするという結果になった。最後は、スピーカーはもう作りたくないという意見だった。

神山町内外の地域に出向き写真集を制作、学校や地域の野菜を取り入れた調理や神山の自然と調和したビオトープ作りなど、今まで学んできた神山創造学から自分と地域の関わりを課題研究で取り組むことができた。

また、保育士になりたいという夢を持っている生徒が、休校中にマスクが不足していることを知り、子ども用のマスクを60枚作製し、後日神山町内の保育所に寄付した。このように主体的に考え、行動できる力はこれからの社会で必要不可欠である。きっと、自分は何ができるのか、と自問自答しながら取り組んだと思われる。



電気を使わない木工スピーカー作り



戦艦長門の木工模型作り

7月に課題研究中間報告の発表を実施した。1、2年生は、食農関係と環境関係の2会場で発表を聞いた。1、2年生にとっては、自分が3年生になったときに、こんなことをしたいと思う機会になった。また、3年生にとっては、自分の考えをまとめる機会になり、振り返りを繰り返し行うことで、これからの課題と改善方法や方向性を考えた。今、自分たちがやっている取組に対して、立ち止まってフィードバックすることになった。

課題研究の仕上げとして、2000字～3000字の作文にまとめ、それをもとに最終発表を1月22日に神山町農村環境改善センターで実施した。大きな会場での発表に緊張しながらも、実際に作った作品を手に取り説明し、質疑応答に答えていた。自分ごとにとらえた課題研究の発表は、聞く側の人の心を動かし、多くの人から質問や感想がよせられた。

会場では、作品や作文も展示し、よりリアルに課題研究の取り組みを感じ取り、発表以外に知ったことやそれぞれの課題研究を多面的に捉えることができた。



中間報告発表会の様子

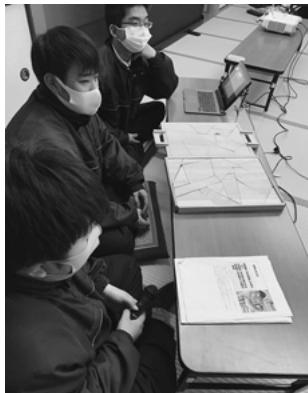


作品を手に持って説明

作文の中には、

「先生やいろいろな人からアドバイスをもらって、それをそのまま実行するのではなくて自分で考え行動する大切さを学んだ。」

という内容を書いた生徒もいた。課題研究を通して、課題や自分と向き合うことで、考える力を身につけ、そこから「深める力」がついたと考えられる。



発表の様子



会場の展示

④ ふりかえりシートからの感想

① 戦艦長門の製作

- ・戦艦長門ができるまでの工程が大変だったことが分かった。
- ・設計図も含め細かな装飾までしていくすごかった。水に浮かぶ姿がかっこよかった。完成度が高い。
- ・すごく時間がかかり手間がかかり、クオリティーが高く細かな作業を丁寧に綺麗にしていた。
- ・いろいろと大変そうで、細かい作業がたくさんあってすごいなと思った。
- ・戦艦長門を作製するのはとても簡単じゃないし、でもそれを最後まで作ってすごいと思った。
- ・自分がやりたいことをしっかりやっているのがすごい。設計図も細かく書いていて良いなと思った。
- ・あまり時間が無いのに最後まで仕上げていたのですごいなと思いました。
- ・戦艦長門の難しい歴史の話が聞けて良かった。かっこいい戦艦だと思う。
- ・パワーポイントが見やすくとても分かりやすい発表だった。
- ・プラモデルを購入し細かい部分を再現したこと、木で作るのはかなり努力したでしょう。
- ・細かい部分まで考えたものづくりとても良かった。
- ・テーマ設定の理由、目標設定、実施、中間報告、展示、作文などの公開が良かった。

- ・木工機械でポール版と自在切りを購入すれば良い。
- ・動画を見せるのはすごく良い方法だと思う。話しも面白かった。
- ・もう少し喋るのを遅くしたら。
- ・中間報告では塗装がされていなかったけど、塗装されてかっこよくなっていた。
- ・中間報告のアドバイスを取り入れているところがすごい。
- ・色を塗った理由を聞けば良かった。
- ・商品化に繋がる仕掛けがほしかった。
- ・細かいパーツを組み立て、木のさざれ等危険な部分を削る配慮がすごい。
- ・実際に見て見えたかった。
- ・最後の感想でどれだけ苦労したのかがよく分かってすごいと思った。
- ・木だけで全部作ったのはすごい、頑張ったことが伝わった。
- ・技術不足と説明がありました的具体的にどこが難しかったか聞いたかった。
- ・ちゃんと設計図から作って本物みたい。

② 電気を使わない木工スピーカー

- ・作るたびに悪い箇所を改善して、いいものを作るということがすごいと思った。
- ・試作しながら試行錯誤していて、目標があり様々な工夫がされていて面白かった。
- ・販売の工夫も良かった。お客様の笑顔が良かった。
- ・スピーカーにも使って見た目にもおしゃれですごいと思った。
- ・なぜ失敗したかをいってくれて、周りの人に聞いたり、学んだことを次に生かして作って、より素晴らしい作品ができて素晴らしいと思った。
- ・試行錯誤しているのが良いと思った。木工スピーカーはクオリティーも良く、音を聞いて感動した。
- ・お金がもらえるのは嬉しいと思った。
- ・木によって音が変わっていくのがすごいと思った。
- ・電池も電気も使わないのが廃材利用でエコで良いと思った。環境に良い。自分も作ってみたいと思った。
- ・同級生にプレゼントしたり目的があり販売して利益を出したり作りがいがあり良い経験になつただろう。
- ・実用的な物を作つて売つて6次産業の体験ができるくて良かった。
- ・無料でもらえたのは嬉しかった。ちゃんとしっかりスピーカーになつていたのですごい。
- ・木のデザインにも考えてすごく良いなと思いました。
- ・場所をとらないので良いと思う。
- ・発表の仕方や考え方がとてもよく聞き取りやすかった。
- ・今のニーズに合つていて、かつ地元の物を使つ素敵な作品だと思った。
- ・電気を使わないスピーカーの発想がすごい。
- ・廃材を使うところがすごい。
- ・最初から商品化を目指していたところがすごい。
- ・デザインに神山らしさがほしかった。
- ・木工スピーカーは画期的な作品だ。
- ・僕も建設関係の仕事につきたいと思っているので面白かった。
- ・画面越しだったからわかりにくかったけど、販売は何個売れたか聞いたかった。
- ・材料費0円から作ったのはすごい。

③ 木工棚と木工収納ボックス

- ・作るのは簡単そうだけど意外に難しいことが分かった。
- ・発表もわかりやすくまとめられていた。使いやすくする工夫がされていた。
- ・デザインもシンプルで大きさもちょうど良く、ちょっとほしいと思った。
- ・簡単に作れそうだと思いましたが寸法をはかるのが難しいし、綺麗にはまる様に作るのが難しいと思いました。手間暇かかっていて良いと思った。
- ・テーマをしっかり決めて失敗しても最後まであきらめず、何度もやり直して完成させて作品を作っているのがすごいと思った。構造もすごい。
- ・自分の課題研究の役に立った。
- ・便利そうだけど、デザインを考えるのが難しいと思った。
- ・造園土木科らしい分かりやすい発表だった。
- ・板を切るのが大変だと思った。
- ・学校の今後に役立つ木工作品をつくって良いと思った。
- ・試作品をいくつか作り自分の収納できる物に近づけていくため試行錯誤した苦労や面白さを感じました。
- ・廃材利用で誰かのために作る目標は素敵だと思いました。
- ・設計図があれば良い。お互いが話し合いながら実施しているのが良い。
- ・同一部品を丁寧にそろえる調べると良い。
- ・質問にすぐ答えられてすごいと思った。
- ・2人設定理由が、学校の役に立ちたい、というところに共通していいなと思った。
- ・来年私たちが大事に使わせていただきます。
- ・収納ボックスにヒモを付けるのはなぜと思ったが、持ちやすくするためと答えてくれた。
- ・チームを組んでいるのに違う物をつくるのが面白い。
- ・何をどうするか考えていて、声も大きく自信を持って話せていた。

④ 植物のリサイクルについて

- ・無駄な木材でも使いようによっては良いものに変わることが分かった。
- ・すごく工夫されていると思った。
- ・ゴミがまだ命につながっていくのだと思った。
- ・イラストなどを使ってとても見やすかった。目的がしっかりして説明もわかりやすかった。
- ・写真的説明や情報がどれもわかりやすかった。
- ・枝などで肥料にできることを教えてもらったことがすごい。
- ・ビオトープづくりは環境に優しいと思った。
- ・実際に続けて使えるプロジェクトと思った。
- ・実際に植物を育て成功させているのですごい。
- ・いろんな植物に使えるのがすごい。
- ・植物のリサイクルはエコになり良いなと思った。
- ・植物のリサイクルは花の苗など、いろいろなところで使えるので良いと思った。
- ・いろんな土があるのが分かった。
- ・リサイクルで作った土で植物を育てて販売したこと、長期の研究を一人でよく努力しました。
- ・自分も草を刈り剪定後の後始末に困っていたので良い、解決策だと思いました。
- ・地域でもこの植物のリサイクルの方法や手順を公開してほしい。
- ・捨てる物が肥料として利用されて地球に優しい活動内容だし、パンジーが育っていて植物以外

にも使えたりするのですか？

- ・ミミズの力も調べてはどうか。
- ・一人でやりきってすごい、質問にちゃんと答えてくれてありがとうございました。
- ・1年生が実習で使っている土は中川先輩が作っていたとはじめて知りました。
- ・土はお金がかかるので、自分で花の土を作ると安くすむことが分かった。

⑤ ビオトープづくり

- ・池を掃除したおかげでいろいろな水生昆虫がいることが分かった。メダカを入れていい池になると思う。
- ・しっかりとビオトープが作られていてすごいと思った。
- ・池の透明度が高く水中の生き物が増えすぎてすごいと思った。
- ・池の水を替えるだけで、池の中、周辺の環境が大きく変わっていくんだなと思いました。
- ・ビオトープのことを詳しく教えてもらい、とても説明がうまくて聞きやすかった。ほかのことにも気づいてそれを発表にするところは、とても参考になった。生き物が沢山いて面白かった。
- ・学校の環境を考えたプロジェクトだった。
- ・細かいところまでしっかりと調べていて良かった。分かりやすいパワーポイントだった。
- ・何年も放置されていた池が綺麗になったのでスッキリした気分になった。
- ・とても聞きやすく分かりやすかった。
- ・力仕事の実習は大変でしたね、よく伝わりました。
- ・単に池を綺麗にするのではなく生物の観点でも考慮されていてGood。
- ・ひきづきこのプロジェクトを進めてほしい。
- ・今まで学んできた造園の技術が活用されていた。1つのビオトープから様々な調査や発見ができて今後の発展がありそうな活動だと感じました。学校の用水路からメダカ・ヤモリを捕まえ池に逃がしたのが良い。
- ・初期の水質と、現在の水質の試験区分（グラフ・データー）があれば研究らしく感じた。
- ・池内の生命のバランスまで考えて本気さが伝わった。今の状態を是非、維持してほしい。
- ・水質調査で紙がピンク色に変わったところは、池の清掃を頑張ったと思いました。
- ・私も生物が好きなので、とても良い発表だった、これからも水質を保ちたい。
- ・いろいろな道具を使いこなしてすごい。
- ・ビオトープという言葉を初めて知れて良かった、これからも看板を見てみたい。
- ・水質検査でカエルの在来種が48種類もあるのに驚いた。
- ・学校の池で食物連鎖があるのを知ってビックリした。

⑥ 青春写真展

- ・写真にこだわったというだけあっていろんな角度からいい写真がいっぱいあった。
- ・いろんな場所に行けて楽しそうな写真が多くていいなと思った。
- ・400枚以上の大量の写真を撮っていたことがすごい。
- ・写真を見ていると本当に楽しいのが伝わった。
- ・神山のいろんなところがわかりいいものを見せてもらった。
- ・那賀町もいって神山町だけでなくもっと地域のことを知りたいと思った。
- ・みんな青春して良いなと思った。
- ・コロナできなくなつたことが多いなか、良く考えて完成させている発表にすごく驚いた。
- ・学生達の青春というものを感じた。高校を卒業しても頑張ってほしい。

- ・結構楽しそうな所や写真があって神山のいろいろなところを知れて、楽しい場所と新しい発見ができた良かった。
- ・神山のいろいろなスポットをめぐる良い機会になって、色を感じて、大人だと身近な地域に自分で行きやすいが高校生だとなかなか難しいと感じたが、先生のサポートがあってすばらしかった。Good。そしてその時の記憶を残していたのは良かった。写真を撮るだけの活動は十分ではと思ったが、丸山先生の「地域で学ぶ」という視点ですごく納得ができました。新生にも紹介してあげて下さい。
- ・楽しそうな笑顔が沢山あって楽しむだけでなく学びながら写真を撮るのもありだと思いました。
- ・神山の何気ない風景がとても素敵と感じた。
- ・何気ないクラスの写真は良い感じだった。
- ・綺麗に写真が採っていた。
- ・協力して地域のことを学んでいることがすごい。発表の仕方や考え方もとても良かった。
- ・神山に住んでおり知っている場所もあった。人とのふれあいがあり、町のことを知ることができた。
- ・何気ない写真を思い出に残すのは大切だと思った。
- ・丸山先生の笑顔が素敵。
- ・自分たちで最高の思い出を残すのは良いと思った。
- ・パワーポイントの発表は斬新で良かった。
- ・写真を文章に表すのは大変だった。

⑦ 青春写真展スライドショー

- ・いろんな思い出が見れて良かった。感動した。
- ・思い出が詰まつたいいスライドだった。
- ・3年の思い出がありすごく良かった。
- ・1年生の頃からの写真があつて良かった。
- ・すごく見やすく面白かった。すてきでした。
- ・笑顔いっぱい楽しそうで良かった。
- ・写真は何回も見たけどいつ見ても懐かしく感動する。
- ・全ての写真や人に思い出が積み重ねられていてすごい。
- ・曲の区切りが上手だった。
- ・動画にすることでいろいろな思い出を振りかえることは良いなと思いました。
- ・仲の良い学年と思いました。青春を感じた。
- ・自分たちだけで協力して深めていくことがとても良かった。
- ・リハーサルより本番が感動した。

発表会全体の、感想、良かった点、改善点を書いて下さい

- ・廃材を利用しているのがすごい。
- ・みんな自分のやりたいことができて良いと思った。
- ・三年生の作った思い出や作品がみてよかったです。
- ・1年しか変わらないのに大人に感じた。
- ・三年生一人一人が自分の課題を一生懸命頑張っていたので感動した。
- ・全体的に各チームの発表はそれぞれ特色があり二年生の参考となつた。

- ・戦艦長門がかっこよかった。
- ・パワーポイントの発表が見やすく話し方もハキハキして分かりやすかった。
- ・発表会に参加して良かった。神山校の取り組みがよく分かった。
- ・これまでの取り組みがよく分かった。
- ・今回の研究を終わらせるのでなく継続して続けてほしい、特にビオトープづくり。
- ・テーマ設定、目標、取り組み、まとめや考察、感想など、分かりやすい説明が良かった。
- ・みんな学びたい内容、研究などに取り組んでいることが今後の発展に繋がる研究だった。
- ・目標や目的に向かって取り組む姿勢やしんしに物事に取り組む活動がすばらしい。
- ・昨年よりプレゼン能力が向上した感じがした。
- ・発表の準備期間が短かったのに、全員発表に間に合ったのはすごい。
- ・進行がスムーズ、質問も沢山でて、有意義な発表会だった。
- ・今の三年生のように発表がしたい。
- ・自分が三年生になったときの参考になった。
- ・最後のスライドショーがとても良かった。
- ・いろんな発表が学校のためという言葉が沢山出て素敵だった。
- ・聞いている人が静かに聞いてくれたので発表に集中できました。

⑤ 全体成果及び評価

今年度は、新型コロナウイルスの感染症拡大防止の観点より、様々なことが制限されたり中止になったりした。そんな中で、縮小や形を変えながら実施することで、自分たちで「できること」を試行錯誤し、主体的に取り組む姿がみられた。担当教職員も当初は「これは無理だろう」と思っていた課題に果敢に取り組む生徒の姿に勇気をもらい、課題研究に取り組む過程の中で生徒の成長を感じた。

また、農業実習が多い科目の評価は、なかなか理解しにくいところがあった。そこで、生徒に評価の仕方を提示することも必要だと議論してきた。まず、ループリック評価を取り入れ、生徒が評価に対してわかりやすく理解することができた。このような評価の可視化によって、生徒のモチベーションを維持した。現時点の自分の立ち位置を確認し、次回はこういうところを努力すると達成できるという見方ができた。

課題研究 3年2学期 作文 80点 / 出席 20点

文字数 (16点)	C 4点 B 8点 A 12点 S 16点
各項目 (4点)	C 1点 B 4点 ①テーマ ②テーマ設定の背景、目的 ③研究計画、内容 ④結果 ⑤学び
その他 (各20点)	C 5点 B 10点 A 15点 S 20点

各項目	C / 達成目標に非到達	B / 達成したいレベル	A / 達成レベル超え	S / 期待以上
文字数	1200字～1999字	2000字～2999字	3000字～	4000字～
各項目	1つ以上欠けている	要素をすべて含んでいる	—	—
伝える力 論理的かつ具体的に文章を構成する [構造化する]	<ul style="list-style-type: none"> 話がつながっていないところが複数ある 具体性に欠け、第三者が読んで理解が困難 	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に筋道を立て表現されている 取り組みや考えたことが具体的に書かれており、読み手が内容を想像できる 	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に筋道を立て表現されている 取り組みや考えたこと、その理由が具体的に書かれてあり、読み手が内容を想像・共感できる 	<ul style="list-style-type: none"> Aに加え、時系列を変えるなど、読み手を想定した効果的な文章表現を用いている
深め る 自ら考えて行動したこと を表現する [見通しを持つ・改善 する・工夫する]	<ul style="list-style-type: none"> 行動したことは書かれてあるが、自分で考えたことのかが分からない 見通しや計画性が見える記述がない 	<ul style="list-style-type: none"> 工夫した点や提案したことなど、自ら考えて行動したことなどが記述されている 	<ul style="list-style-type: none"> 工夫した点や提案したことなど、自ら考えて行動したことなどが記述されている 課題の原因を分析して改善を試みたことが記述されている 	<ul style="list-style-type: none"> Aに加え、原因の分析やその改善策の検討がより高度なレベルで行われている
課題研究での経験を、 実社会に活かせる学び に変換する [関連づける]	<ul style="list-style-type: none"> 得た体験をそのまま記述しており、学びへの結びつけが十分に行われていない 経験から得た学びが漠然としている 	<ul style="list-style-type: none"> 体験から得た学びや気づきが表現されている 実社会とのつながりを意識していることが読み取れる 	<ul style="list-style-type: none"> 体験から得た学びや気づきが、実社会で応用可能なものの（教訓）として表現されている 経験を生かそうと考えていることが見える 	<ul style="list-style-type: none"> Aに加え、社会の仕組みや課題にまで考察が及んでいる

課題研究 3年3学期 発表 80点／取り組み姿勢 20点

伝える力 （60点／各15点）	C 5点	B 10点	A 13点	S 15点
深める力 （20点／各10点）	C 3点	B 6点	A 8点	S 10点

伝える力	C / 達成目標に非到達	B / 達成したいレベル	A / 達成レベル超え	S / 期待以上
声の大きさ、話すスピード 取り扱う	声が小さい、抑揚がない、原稿の棒読みになっているなど、聞き取りにくいことがある	声の大きさ、スピードが適切で、聞き取りやすい	抑揚をつけたり、問い合わせを入れたり、顔を上げて発表するなど、発表に工夫がある	全く原稿を見ず、聞き手を魅了する話し方をしている
視覚的な工夫	視覚的な工夫がほとんどない	写真や現物を用いて発表している	写真や現物を効果的に用いて発表している	[A]を超えて聞き手を魅了する報告になっている
聞き手とのやりとり [質疑応答]	質疑応答に参加していない	質問に答えている	質問の意図を捉え、的確に答えている	ユーモアを混ぜるなど、場が沸く質疑応答が繰り広げられている
報告内容を聞き手にとって理解しやすいように組み立てる	・話がつながっていないところが複数ある ・具体性に欠け、第三者が聞いた理解が困難	・全体的に筋道を立てて表現されている ・取り組みや考えたことが具体的に報告され、聞き手が内容を想像できる	・全体的に筋道を立てて表現されている ・取り組みや考えたこと、その理由が具体的に報告され、聞き手が内容を想像・共感できる	[A]に加え、時系列を変えるなど、聞き手を想定した効果的な表現を用いている
深めめる力	・発表内容が、自分で考えたことなどのかが判別できない、見通しや計画性が同える報告がない	・工夫した点や提案したことなど、自ら考えて行動したことなどが表現されている	・工夫した点や提案したことなど、自ら考えて行動したことなどが表現されている ・課題の原因を分析して改善を試みたことが表現されている	[A]に加え、原因の分析やその改善策の検討がより高度なレベルで行われている
課題研究での経験を、実社会に活かせる学びに変換する	・得た体験をそのまま報告するに留まり、学びへの結びつけが十分に行われていない ・経験から得た学びが漠然としている	・体験から得た学びや気づきが表現されている ・実社会とのつながりを意識していることが見える	・体験から得た学びや気づきが、実社会で応用可能なものの（教訓）として表現されている ・経験を生かそうと考えていることが見える	[A]に加え、社会の仕組みや課題にまで考察が及んでいる

少しづつだが、生徒は神山創造学で学んだ力を身につけて課題研究につなげている。神山創造学から使っている3年間のノートやファイルがその証である。

⑥ 今後の対応と課題

生徒のいろいろやりたいことを、どう農業の学習指導要領に落とし込むか、ということが今後の課題となる。

課題研究の学習指導要領の目標は「農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、社会を支え産業の発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することを目指す。」である。

さらに、指導項目として

- (1) 調査、研究、実験
- (2) 作品製作等
- (3) 産業現場等における実習
- (4) 職業資格の取得
- (5) 学校農業クラブ活動が挙げられる。

神山創造学の学びから、地域や社会に目を向けて考える力を身に付け、農業の学習を深めることができるように指導していく必要がある。また、課題の設定ができない生徒に対して、教職員が寄り添いながら一緒に伴走できるような対応も必要になる。課題研究への接続がスムーズにいくように、2年次の神山創造学から意識づけさせる指導を目指す。

(4) グランドデザインおよびループリックの作成と評価

① 目的

神山校で育みたい力、学びのスタイル、生徒募集方針をグランドデザインとして明らかにすることで、生徒・教職員はもとより広く学校関係者と認識を合わせることを促進し、より質の高い教育活動に取り組める状態をつくり出すことを目指す。すなわち、グランドデザインがあることで、教職員は学校全体で育みたい力に基づいた教育活動を展開できるようになり、生徒は本学で期待されている学びを理解できるようになることが期待される。またこれから入学を検討する中学生やその保護者、中学校教員は、本学がどのような教育方針を持った学校か理解した上で進学を検討することができるようになり、地域社会は本学の目指す方向に基づいた提案、要望、連携をしやすくなることが期待される。

また、育みたい力を意識して各教科での教育活動が行われているかを教職員と生徒双方が確認・刷新できることを目指し、成績評価に利用するループリックをつくることとした。

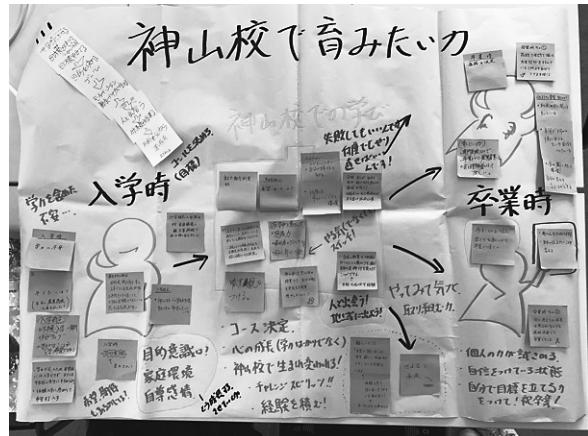
② 実施内容

a. 教職員研修

第1回 令和2年7月15日

本事業の背景の背景として、2017年より始まった神山創造学や学科再編の過程などを地域協働学習支援員の森山氏より説明を行なった。

「学校全体で育みたい力は？」を問い合わせに掲げ、①入学時点の生徒の状況、②卒業時に目指したい状況、③そのためには在学期間に必要な機会や望ましい学校の状況、の3点について小グループで話し合った。



第2回 令和2年8月31日

「各教科で育みたい力は効果的に測られているか？」を問い合わせに、担当教科で育みたい力と現在の成績評価の方法を各自が書き出し、小グループで共有を行なった。

現在の成績評価を「数値で表しやすい、表しにくい」「直接評価、間接評価」の4象限にプロットし、生徒の自己肯定感と評価とのつながりなどについて話し合った。その後、実際にループリックを作成するワークに個人で取り組んだ。

第3回 令和2年10月7日

「学校全体で育みたい力と教科の成績評価がどのようにつながっているか？」を問い合わせに、基本的なループリックの作成手順を示した上で、小グループで一つの教科のループリックを作成するワークに取り組んだ。

b. ループリック作成相談会

令和2年11月19日、26日

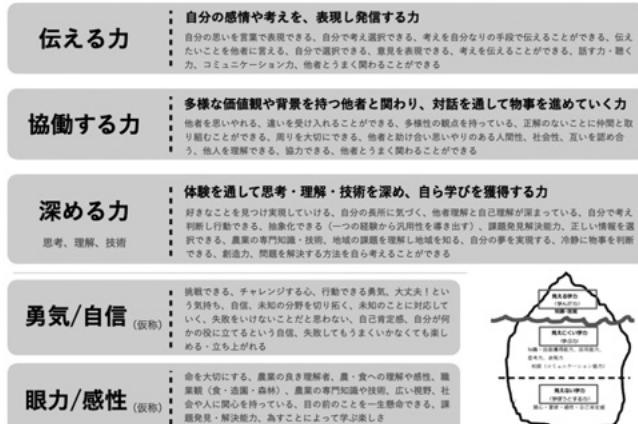
希望者で自身の担当教科のループリックを作成する場を持った。

c. グランドデザイン研修

令和2年1月25日(月), 29日(金), 2月12日(金), 24日(水)

上記教職員研修の中で出てきた教職員らのコメントを、神山校で育みたい力としてまとめ直した。株式会社フードハブ・プロジェクトのデザイナー石橋剛氏の協力を得て、関係者と効果的に共有できる資料として整理した。

神山校で育みたい力



これからの中食・農・環境をめぐる 感性と技能力を育む

育む力

多様な人たちと
関わる力

協働
する力

伝える
力

自分の想いを表現する力

深める
力

経験から学ぶ
力

学びのスタイル

いまここから、 多様な人と実践的に学ぶ



地域と教室が学びの場
校内外で様々な人たちと関わり
合いながら、教科書から理論を、
実社会から実践を、学びます。



1クラス15人の少人数教育
自分を表現し、他者の表現を受け
とめる。発表や話し合いを繰り
返してコツをつかんでいきます。



食・農・環境を通して学ぶ
自然の中で五感を使って学び、
日々の暮らしや社会システムへの
まなざしを鍛えます。



つくり手になる経験
仲間や地域の人たちと協力して
「つくり出す」経験を積みかさね、
できることを増やします。

1年

「神山創造学」で
学びのスタイルを
体感。農業実習や
先輩の発表から
コースを選択。

2年

コースに分かれて
専門的に学習。
仲間たちとプロ
ジェクトを実践。

環境
デザイン

食農
プロデュース

3年

自分の「深めたい」
をテーマにして
「課題研究」で
企画、実践。



こんな子に来てほしい!!



③ 全体成果と評価

教職員間での議論の積み重ねを経て、神山校で育みたい力を明文化することができた。全国の高校のグランドデザインの例を見比べると、想定される利用シーンが学校ごとに異なることが分かった。神山校で必要なグランドデザインはどのようなものかを考え、実際に広く発信していくものにまとめることができた。

ループリックという言葉自体が多くの教職員にとって聞きなれないものであったが、教職員と生徒が共通認識を持つことのできる物差しがあることの有効性は概ね理解を得られたと思われる。

(教職員の声)

- 今までの成績評価の中で、明確化できていなく感覚で点数化している部分があり、これから評価規準を作ることで、生徒の評価を適正に行なうことにつながると改めて考え直すことができた。特に実習を伴う科目での習熟度判定の規準となって利用できていくと思われる。
- 各教科でループリックを考えていかなくてはいけないと思うが、普通教科は本校は1名ずつなので大変難しいと思った。教科の枠を超えて、作成していく方がいいかなと思った。
- 生徒が自己評価できる力も大切なことなのだと改めて思いました。授業の目標を明確にし、生徒が学習に取り組みやすいように（すべきことが分かるように）工夫したいと思いました。
- 例えば1つの育みたい力をループリックにするためにも、様々な観点（視点）で作る必要がでてきて、難しかったです。しかし、ループリックを作つておけば、判断基準がはっきりし、教員にとつても生徒にとっても分かりやすくてメリットが大きいと思いました。

④ 今後の対応と課題

完成したグランドデザインは、今後本学のホームページや学校説明会、様々な場面で活用していく。

今年度は実際の教科で使うことを想定したループリックを試作するところまで行き着いた。来年度は実際に運用して生徒の反応を確かめながら改善していく。中には「専門家からのコメントが欲しい」といった声もあり、新学習指導要領への移行を視野に入れながら成績評価やカリキュラムデザインに関する理解をより教職員らが深めていく学習機会を持つことが望ましい。

(5) キャリア教育の取組～インターンシップ～

① 目的

1年次の神山創造学で実施した「まちぐるみ仕事体験」を土台とし、さらなる人生観や仕事観を養う。インターンシップを通して、「どの職業を選ぶのか？」だけを考えるのではなく、職業を選択するために大切な「自分を理解する」機会にする。

生徒一人一人がインターンシップでの目標を設定し、仕事に従事する。事前指導だけではなく、中間・事後の振り返りを充実させることで、職業を選択する上で必要な自己理解を深化するとともに、高校卒業後の進路に対しての意識を高める。

② 対象生徒

2年生希望生徒（4名）

③ 実施期間と受け入れ事業所

- フードハブプロジェクトかまパン＆ストア（8月16・20・21・22日）
- 名西消防組合（8月17・18・20・22日）
- 株式会社神山モータース（8月17・18・20・22日）

- 徳島中央森林組合（8月17・18・20・22日）

④ 活動内容

- a. 事前オリエンテーション（8月6日）

- 内容：インターンシップのねらい

- 感情表現のことば理解

- 他者評価による自分の「力（強み）」発見

- インターンシップ志望理由及び目標発表

- スケジュール及びレポート（日報）説明

- b. インターンシップ体験（前半）

- 各事業所を訪問し、仕事を体験する。

- c. 中間振り返り（8月19日）

- 2日間終えての感想

- 日報を元に、仕事内容や感じた気持ちを互いに共有

- d. インターンシップ体験（後半）

- 各事業所を訪問し、仕事を体験する。

- e. 事後振り返り（8月24日）

- 内容：インターンシップを終えての感想を互いに共有

- 今後の目標設定

- 1年生に向けた発表準備

- 発表内容⇒インターンシップに参加した理由

- インターンシップでの目標及び結果（達成度）

- 印象に残っていること、その時の気持ち

- 仕事に対する気持ちの変化

- 今後の目標

※ 上記の内容を2学期にある1年生の神山創造学で発表し、1年生は10月実施の「まちぐるみ仕事体験」に向けて参考とする。

⑤ 全体成果及び評価

1年次より仕事を体験する時間が増えたことで、「自己理解」を深めることができた。また「勤労観・職業観」の形成にもつながった。生徒のレポートにも自分の気持ちや考えが詳細に記されており、「言語化」することの重要性も認識できたと考える。

【体験した仕事を将来やってみたいと思う気持ちとその理由】

- 実施前70% ⇒ 実施後80%

実際に体験して必要な力や道筋などを学び、少しはあるが気持ちがはっきりした。消防士の体験をしたことで、人を助ける仕事は他にもたくさんあることを知った。他の選択肢についても調べたいと思った。

- 実施前60% ⇒ 実施後50%

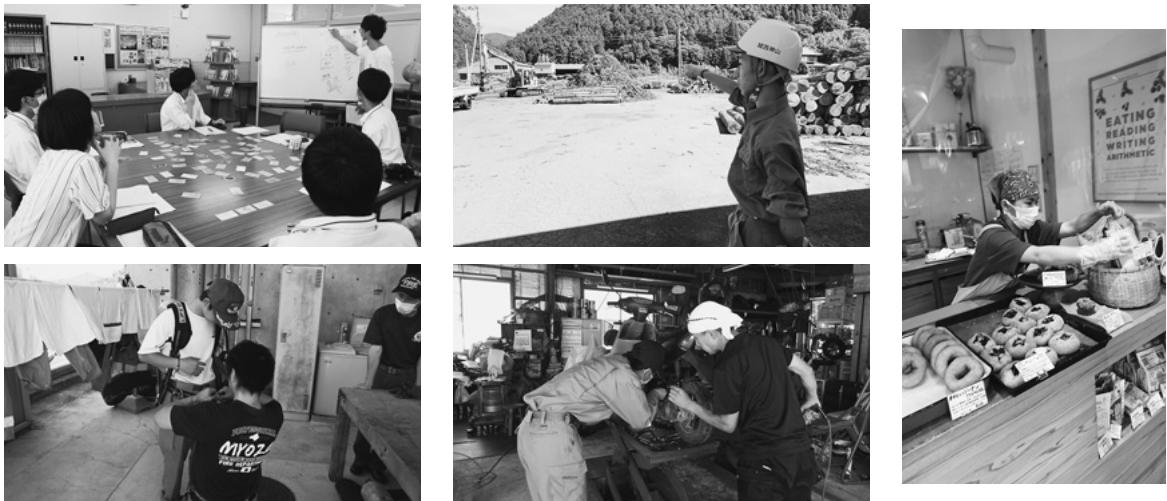
体験した仕事をしてみたい気持ちと他の仕事をしてみたいという気持ちがちょうど半分半分。慣れない仕事で楽しいところもあったし、大変なところもあった。日にちを積み重ねたら%も上下に変わるものかもしれない。
- 実施前90% ⇒ 実施後95%

実際にやってみると大変だったが、その中でも大きなやりがいがある仕事だと感じた。他にも色々な仕事を知りたい。
- 実施前100% ⇒ 実施後120%

林業の仕事をしたいと言っていたが、林業にも色々な仕事があることを知らなかった。インターンシップに行って、木を切る作業だけではなく、山を開く作業もあることを知った。見るだけの作業もあったが、すごくかっこよくてもっと林業に興味を持った。

⑥ 今後の対応と課題

次年度も引き続きインターンシップを推進する。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、インターンシップを希望していたが断念した生徒もいた。生徒の進路実現に向けて、希望に添ったインターンシップを実施していきたい。



孫の手プロジェクト

(1) 目的

一人暮らしになり、家の周りの草地や庭木の手入れが難しくなってきた高齢者のお宅に。城西高校神山校の高校生が訪れ、学校で教わった農業の知識や造園技術を活かして、その困り事を有償で解消するプロジェクト。

これは「便利な地域サービス」ではなく、草刈り等を介した「交流プロジェクト」であり「実践教育の機会」である。この取り組みにより「高校の新しいあり方や地域との関係性」の模索を目的としている。

合わせて、授業で学んだことを活かし、誰かの役に立つ・誰かに喜んでもらうことを実感し、仕事観を養うことも目的としている。

(2) 対象生徒

城西高校神山校全生徒（男女や学年、科を問わない）

(3) 連絡先

団体名：一般社団法人神山つなぐ公社 代表理事 桢谷 学
住所：〒771-3311 徳島県名西郡神領字本野間100
電話番号：050-2024-4700

(4) 実施内容

日時：令和2年8月17, 18, 20日, 12月19日
令和3年1月16, 17日, 2月27日 計7日間
場所：町内14箇所
参加人数：延べ54人

プロジェクトの進行は次の手順で行なっている。

- ① 地域のお年寄りへのチラシを配布し、依頼は公社が受け付ける。
- ② 電話等で依頼があると公社スタッフが直接訪問し、作業内容や日程を調整し取りまとめる。
- ③ 学校に連絡し、参加したい生徒に集まってもらい事前のミーティングを持つ。
- ④ 依頼案件の詳細を伝え、自分がやりたい仕事やできる仕事を考えながら、生徒同士で相談し、学年を超えた縦のつながりがあるチームを決定。
- ⑤ チームごとに下見に出かけ、必要な道具や作業内容をイメージする。
- ⑥ 当日は、依頼者に挨拶をし、作業内容の確認を行った上で分担し、協力して作業を開始。
- ⑦ 途中休憩では、お菓子を頂くことがあり、お年寄りと世間話をしたり作業の進捗状況なども確認する。
- ⑧ 最後に作業完了の確認を行い、剪定クズなどの清掃と片付けをする。
- ⑨ 依頼者から公社への作業代をいただき、生徒には公社からアルバイト代を支給、領収書も記入。
- ⑩ 使った道具を学校の車に乗せ高校へ。片付けて、一日の作業が完了。
- ⑪ 後日、すべてのチームが集まり振り返りの時間を持ち、他のチームと共有。



チェーンソウを使って伐木する様子①



チェーンソウを使って伐木する様子②



依頼者に仕事内容を聞く生徒たち



仕事を終えて依頼者と記念写真

(5) 全体成果及び評価

昨年度の課題を元に、事前事後のミーティングの充実を図った。

事前の下見では、単に現場を見るだけでなく、当日の作業に必要な道具をシートに記入し提出。平生の授業ではふざけている生徒が、下見の場面では真剣にシートを記入するなど、普段見ることができない一面を見ることもできた。事後は作業日とは別にミーティングを持ち振り返りの時間を設けた。各チームで「作業内容・できしたこと・できなかつたこと・次に活かすこと」を話し合い、他のチームに共有する時間を持った。当日だけでなく、事前事後の時間をしっかりと設計することで、より自分ごととして、責任を持って取り組めるようになった。

(6) 今後の対応と課題

昨年度と同じく、公社が中間に立ち、地域のお年寄りと神山校の生徒をつなげている。生徒の安全管理のため必ず公社スタッフが立ち会うようにしているが、それゆえに日時や地域が限定される事につながっている。町内の造園技術を持った大人と連携し進めることで、もう少し日時や地域の幅が広がるように検討を重ねる必要がある。

今年度、卒業予定の生徒から、卒業後も参加したいという声が上がった。在校生にとってOBOGとの繋がりが生まれ、卒業後の進路の情報を得る機会、将来を考える機会になるため、その可能性も検討をする必要がある。

IT キャリア教育講演会

a 目的

地域との協働による高等学校教育改革推進事業のプロジェクトのキャリア教育の充実の一環で、地域のIT企業の講師を招き進路選択の領域を広げ、進路実現への推進を図る。

b 対象生徒

全学年

c 実施日及び時間

令和2年7月28日(火) 10時40分から12時10分

d 実施場所

城西高等学校神山校 体育館

e 講師

神山サテライトオフィス・神山・メイカー・スペース 理事 本橋大輔 氏

f 講演内容

徳島県庁と同じく、徳島県神山町にある『神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス（以下、神山コンプレックス）』にサテライトオフィスを構える株式会社ダンクソフト。実際にここで働いている本橋さんに、神山で働くことの魅力を話して頂いた。本橋さんは、株式会社ダンクソフト所属のプログラマーで、埼玉県出身。前職がきっかけで徳島に移住し現在は神山コンプレックス内に置く神山オフィスでは、3Dプリンターやレーザーカッターを使用したワークショップなどを開催し、地域と関わり合いながら、神山ならではの目線で数々の新規事業開発を行っている。

講演では、「本業も副業も、すべては趣味とつながっている」という内容からはじまり、神山で働くことで得られるメリットは、会社でのぼくのミッションは新規事業開発で、どんどん新しい事業を作っていくことなんんですけど、今まで立ち上げた事業のほとんどはここにいなければできなかつたことだと思う。例えばここに遊びに来た昔の知り合いや、お客様として来られた方の相談内容がそのままカタチになる。最近だとドローンを飛ばし、それもこの辺りだったら割と自由にできる。あとは神山コンプレックスだと広いスペースが使えるので、その辺

らかしながら作業ができる。神山は広いスペースが使えるからこそいろんな発想ができる。この環境じゃなければドローンを飛ばすことも含めて、思いつかなかつた事業もたくさんあつただろうと感じる。

今回は、ドローンを使った実演をワークショップ型式で開催した。ローンを顔認証して操作するという体験を繰り返した。その他、3Dプリンターを使ってモノづくりの話し、小学校でのプログラミングの教材を作るプロジェクトなど面白い話しが多かった。

g 生徒の感想

「体育館で、ドローンの操作が簡単にできるとは思わなかった。」「本橋さんのようにクリエイティブな仕事に就きたいと思った」「神山での暮らしと仕事を楽しんでいて、本業と趣味を仕事に取り入れているところがすごい」「小学校にもプログラミングを教えてイルの驚いた」「先輩が3Dプリンターで物作りをやっていたので、3年生になった課題研究で物作りに挑戦したい。プログラミングは難しそう」「ドローンの体験と操作をやらしてもらい楽しかった。まるでドローンが生きているようで興味がわいた」「いろんな仕事があることがわかりいい話が聞けた」など、生徒にとっては興味や環視を得て将来の進路選択の見極めになっていく講演会となつた。

h 成果と課題

3年生はもちろん、1・2年生もIT企業のクリエイターの話を直接聞くことで進路意識の高揚が感想からも見られた。具体的には、興味のある生徒から自主的に手お上げドローンの操作を行い、本橋さんに積極的に質問をしたり、かなり興味を示す生徒も複数いた。本橋さんからのコメントで「生徒とお互いに多くの話しができて良かった非常に充実した講演ができました」という意見をいただいたのが成果と言える。課題としては、神山校にはIT機器が充実しておらず、徒歩でサテライトオフィス・コンプレックスの訪れ研修や作業をさせて頂いている。今後、校内でのIT環境の整備や関連行事の検討をしていく必要があると感じた。



(図1) 生徒がドローン体験をしている様子。



(図2) 講師、本橋さんの講演の様子。

酪農家キャリア教育講演会

a 目的

地域との協働による高等学校教育改革推進事業のプロジェクト、キャリア教育の充実の一環で、懸河から他地域へ移住し畜産家の道に進んだ講師を招き進路選択の領域を広げ、進路実現への推進を図る。

b 対象生徒

全学年

c 実施日及び時間

令和3年2月1日(月) 13時30分から15時30分

d 実施場所

城西高等学校神山校 体育館

e 講師

島根県隠岐郡西の島の酪農家 西川 秀樹 氏

f 講演内容

冒頭、「私は元小学校の教師で動物と自然が好きで西の島に移住して牛飼いを始めました。」その後、西の島の暮らした仕事について体験大や、面白いクイズをまぜながら講演会が始まった。西川さんから「隠岐の西の島では復業している」「自分も一つに仕事の選択を決められなくて悩んでいる時期があった」「自分で決めることは後悔しないこと」「学校の先生を辞めてどうして牛飼いになったか」「牛を飼っている西の島のこと。西の島がどんな島なのか」「島根が美肌全国一位」など島根県や牛の話しをまぜながら、西川さんの島での仕事ぶりが分かる講演であった。

g 生徒の感想

生徒からは「将来なりたい仕事について考えるけど、副業について考えたことがない」「2つの仕事を両立していることがすごい」「学ぶことを楽しんでいて、自分で決めたことは後悔したことという言葉に響いた」「失敗続きでもくじけないのはなぜか気になった」「どんな生活をしているのかもっと聞きたかった」「西の島の自然をみたいと思った」「水道がないことに驚いた」「牛の話しや動物の体についてよく分からなかったから知れて良かった」「糞をするときしっぽを揚げ、親牛が全て雌で女の子の名前ということや、牛の見分け方で鼻の指紋で見分けることに驚いた」「小学校の時に酪農の経験があって牛を勉強したり触れたりしたのでなつかしい話しだった」などの感想があった。

h 成果と今後の展開

講演の最中に「ふりかえりシート」を記入させ以下の気づきがあった。「酪農についての職業が理解できた。」「失敗することを恐れずに気になった事、興味がわいたことに挑戦していく」「電波が繋がらなく、水も電気がない山の中で牛を飼って生活することはすごい」「小学校の先生を辞めて島根でうしを飼っているのはとてもすごいと思った」「西の島は海が綺麗で自然豊かで食べ物が美味しい人が優しい良い島だなと思った」「牛の話や酪農家の話しを良く聞けて良かった。勉強になった」「小学校1年生の時にお世話になった。かなり久しぶりでびっくりし嬉しかった」「西の島や島根県出雲に行ってみたい」「自分のやりたい仕事をやろうと思った」「一つの仕事にとらわれず生活をしているのがすごい」「牛のクイズが面白かった、牛以外にもユズを育てていてすごい。とても勉強になった」「とても分かりやすく面白い先生だった」「無理して頑張るのではなくゆったり、自分のできることを少しずつ挑戦して行っているんだなと思った。」「島の人がほとんど優しいのはすごい」「私の小学校の恩師が来て驚いた。私に『いつか会える』と言ってくれたのを今だに忘れません。すぐく会えるのが久しぶりで涙が出そうになりました」「素敵な生き方だなと思った」「牛や地域にも愛があふれていて幸せそうだなと思った、牛に対する熱意が伝わった、牛のことについて知っていることや知らないともあった」など、多くの気づきがシートにかかれていた。この背景には、グループで話しの内容を共有させると言う時間を設け築いたことを記入させると言うことを、講演の前にワークショップで実施した成果の現れだと感じた。

今後も、感想を共有する場面を取り入れたアクティブラーニングを展開していく必要がある。



(図3) グループワークで意見を共有。



(図4) 牛の話しを熱弁する西川さん

(6) プロジェクトアドベンチャー研修

① 目的

神山校の職員が、プロジェクトアドベンチャーの考え方や手法を学び、普段の教育活動に活かせるようになると共に、来年度以降のオリエンテーション合宿の企画を考えられるようになることを目的とする。

② 日程

令和3年2月3日(水) 13:00~16:20 研修Day1
令和3年2月4日(木) 9:00~12:00 研修Day2
12:40~15:30 生徒向けプログラム
15:45~16:45 振り返り

③ 実施方法

オンラインワークショップ

④ 対象者

地域創生類担任4名及び神山創造学担当教員2名、地域協働学習実施支援員4名 計10名

⑤ 講師

プロジェクトアドベンチャージャパン スタッフ 加藤央、渡邊貴大、杉村厚子

⑥ 実施内容

a 研修Day1 (プロジェクトアドベンチャーを構成する学習モデルを学ぶ)

プロジェクトアドベンチャーを構成する概念について、ワークショップや講義を通して、基本的な概念や歴史について学習した。

b 研修Day2 (プロジェクトアドベンチャープログラムの枠組みを学ぶ)

学びの場をデザインするための要素やプログラムデザインの全体像など、午後からの生徒に向けたプログラム実践に必要な内容について講義を受け、実際にプログラムを考え、全体で共有した。



図1 (研修の様子1)



図2 (研修の様子2)



図3 (研修の様子3)

c 生徒向けプログラム

研修で考えたプログラムの実践を行った。実施したアクティビティは、ネームトス、イラスト指示、ブラインドスクエアの3つである。各グループには、教員と地域協働学習実施支援員が1名ずつファシリテーターとして参加し、プログラムの進行を行った。研修で学んだ内容を元に進行やアクティビティの内容を少しずつ変化させ、それぞれのグループに応じてプログラムを進めることを心がけて行った。



図4 (ネームトス)



図5 (ブラインドスクエア)



図6 (イラスト指示)

d 振り返り

T（実践したこと）W（わかったこと）T（次に試したいこと）Q（疑問やもやもやしていること）を用いた振り返りを実施した。プログラムをデザインし、実施してみての感想とグループの様子や雰囲気について共有し、疑問点やアドバイスをいただいた。

⑦ 全体成果及び評価

今回、プロジェクトアドベンチャーを実施する上で基礎となる部分を学ぶことができた。今まででは、すでにその手法を習得している教員の指示を仰いで、進めるだけだったが、実際に、一連の流れを体験することで、プログラムの組み立て方や進め方、振り返りの方法などを深く考える、いいきかっけとなった。

特に、興味深かった事として「Cゾーンモデル」がある。図7のように構成される領域で、人が成長する領域として、ストレッチゾーンがあり、そこへ参加者を導くことは、難しく、誤ったアプローチを行うとパニックゾーンへと追いやってしまう可能性があり、プロジェクトアドベンチャーでは、自己選択と自己決定による課題への挑戦を促しながらプログラムを進行することが重要なプロセスになる。このことは、普段の学校生活にも使用できる考え方だと感じた。



図7 (Cゾーンモデル)

⑧ 今後の対応と課題

今後は、今回の研修参加者で次年度の新入生合宿を企画することになっている。研修で学んだ手法を利用し、生徒たちにとって実りある合宿を企画したいと考えている。

(7) 基礎学力の強化

① 目的

社会的・職業的自立に必要な基礎学力の定着を図る。また、「学びの基礎診断」の認定ツールの活用を通して、客観的に認識する。

② 対象生徒

全学年

③ 実施内容

a 小テストの実施

日時 毎月月初めの3日間（朝の SHR）

科目 国語（漢字）・数学（計算）・英語（英単語）

対象 全学年

年度当初に各科目のテキストを配布し、各月の範囲を決めて計画的に学習しテストに臨むよう指導している。全てのテストをファイリングし、復習に役立てるようしている。また、学年末には成績優秀者を表彰し意欲喚起に努めている。

b 放課後補習の実施

日時 月曜日・火曜日・水曜日・金曜日の放課後

科目 国語・数学・英語・一般教養

対象 第3学年：希望者

第1・2学年：全員

1学期は3年生のみ、2学期から1・2年生の補習を実施した。3年生の一般教養は就職希望者対象のものである。

c 「学びの基礎診断」テストの実施

日時 第1回 令和2年5月21日(木) 全学年

第2回 令和2年12月16日(水) 第1・2学年

第3回 令和3年2月25日(木) 第1・2学年

科目 国語・数学・英語

内容 学研アソシエ「基礎力測定診断ベーシックコース」

（高校生のための学びの基礎診断に認定された測定ツール）

対象 全学年

1・2年生は年間3回実施した。3年生は5月のみの実施であった。長期休業中に事前学習のワークブックを学習するよう指導し、補習でも活用した。

④ 全体成果及び評価

小テストは数十年前から実施している取り組みであり、生徒の中では毎月行うことにより習慣になってきている。また、放課後補習は昨年度からの取り組みである。3年生に関しては個別による対応のため生徒一人一人の苦手な分野などを把握することができ、個人に応じた学習法を行うことができる。1・2年生は全員受講のため、授業の補足等もおこなえる上に、少なからず学習習慣が身につきつつある。

「学びの基礎診断」テストは2年目となり、全員が補習や家庭での事前学習にも取り組み、受験した。各自、自分自身の成績を確認することにより、定期考査以外での自分の客観的な学力を認識できたと思われる。1年生は、第1回より第2回の偏差値が上昇した人数の割合が46.7%と昨年度と比較して成果は出でていない。

⑤ 今後の対応と課題

小テストについては、年々生徒の意欲が減退し、成績の向上もみられない。在学3年間で必要不可欠であると思われる内容を学習しているので、生徒には意欲的に取り組んでもらいたいと考える。放課後補習に関しては、1・2年生についてはほぼ全員が参加しており、昨年同様、学習習慣を定着させたいと考えているが、教室の確保と学校行事の兼ね合いで毎週3回コンスタントに実施できていない現状がある。また、各教科担任が1名しかいないため、今年度は学級ごとに各教科隔週の実施とした。

「学びの基礎診断」テストは次年度も引き続き実施する。次年度、3年生が3年間通して受験してきた最初の生徒達となるので、3年間の成果を検証したい。

さらに、朝の SHR で第3学年が基礎学力向上を目指してプリント学習を実施した。来年度も引き続き実施し、少しでも生徒に必要な基礎学力の定着を図りたい。

また、全員受験の「漢字検定」の実施も引き続き実施する予定である。希望者受験の「英語能力検定」に加え、来年度は「数学検定」の実施も考えている。

2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

(1) 造園教育における「専門人材の配置」

① 目的

各コンソーシアム構成組織以外にも神山町は、多様な企業、NPO 法人があり、多彩な専門人材を有している。このような地域との連携を通じて、「高度専門資格取得」を目指し、専門的な知識・技術の習得と次代の産業界を担う人材育成を図ることを目的とする。

② 対象生徒

地域創生類（環境デザインコース）2年生16名

③ 連携先

団体名：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬

住 所：〒770-0847 徳島市幸町3丁目109-1 細川ビル3F

電話番号：088-653-1071

④ 実施内容

a 造園技能検定3級講習会

日 時：令和2年12月4日(金) 午前9時から午後3時まで

科 目：造園技術・造園計画・総合実習

場 所：造園土木実習棟1階、検定場

講 師：徳島県造園業協会 副会長 須見 一三 氏

会 員 寺岡 健介 氏

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、前期試験が中止になった。そのため、後期試験で造園技能検定3級合格を目指すことになった。検定合格に向けて、具体的なアドバイスを頂き、竹垣の組み立て敷石の方法など、検定で審査員がチェックするポイントや見栄えをよくするための技術を教わった。時間配分など細かな注意点の説明を受けた。



竹垣と敷石の完成度について説明



四ツ目垣の作製ポイントの説明

b 造園技能検定2級講習会

日 時：令和3年2月2日(火) 午前9時から午後3時まで

科 目：造園技術・造園計画・総合実習

場 所：造園土木実習棟 1 階、検定場
講 師：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬 氏
監事 水主 圭三

3級受験者全員を対象に、午前中は、2級のDVDを見ながら、実技の注意すべきポイントを教わった。竹の向きや切る位置など細かい指導を受けた。午後からは、グループに分かれ、竹垣と敷石を実際に練習した。飛石や縁石の配置の仕方や見栄えをよくするための竹の向きなどを教わった。それぞれの作業工程でのポイントを理解した。



DVD による作業手順と方法の説明



縁石と飛石の配置について説明

⑤ 全体成果及び評価

造園技能検定3級16名、造園技能検定2級2名が資格試験を受験した。今年度は、前期試験が中止になったため、後期試験での受験になり、生徒の検定に対するモチベーションを維持していくのが難しかった。それでも、昨年度に造園技能検定2級の講習を受けた造園土木科3年生2名が資格試験に挑戦した。今年度の2年生も来年度2級に挑戦し合格者が出せるよう指導していく。

(生徒の感想)

- ・2級は、3級と違ってレベルが高くて難しそうに感じた。シュロ繩の結び方も全然違うので、覚えるのが大変そう。
- ・飛石は人が歩くための石なので、それを意識して石を配置しないといけないことが分かった。
- ・自分で庭を作つてみたいと思ったけど、石が重いので大変だった。

⑥ 連携先からの意見

造園の技術を身に付けるのはもちろんだが、造園業は幅が広いので、いろんなことにチャレンジできる姿勢や人とコミュニケーションをとることも大切。せっかく勉強しているのだから、是非とも将来造園関係の仕事に就いて欲しいとの意見であった。県下で唯一造園が学べる高校として、高度な資格取得にこれからも取り組むことに期待したい。

⑦ 今後の対応と課題

指導する科目と教員を早めに決定し、指導計画を作成させる。そして、指導を継続的に行うことにより造園技能検定2級の2名以上の合格者が出来るようにしていく。

生徒は、検定に取り組むことで、造園の基本的な技術を学んでいる。それを「面白い」「奥深い」と感じて、より高度な技術に興味を持たせることができるように、地域で実践できる場、具体的には「孫の手プロジェクト」につなげていけるように、どんどん提供していく必要がある。

(2) 多様な地域連携を実現する教育課程の構築

地域との協働による探求的な学びを実現する学習を、各教科、科目に位置付け関連を持たせることで、学校全体の授業改善を図る。そして、生徒や教師、地域関係機関が協働体制を構築し、地域との協働を通して個別最適化の学習を進めていく事を目的とする。

① 第1回カリキュラム開発専門家会議

日 時：令和2年12月10日(木) 午後2時から午後4時まで

場 所：徳島県立城西高等学校神山校 視聴覚室

参加者：鳴門教育大学 尾崎士郎特命教授

四国大学 安永潔准教授

徳島県教育委員会学校教育課 寒川由美指導主事

徳島県教育委員会学校教育課 中川望指導主事

教職員16名及び地域共同学習支援員4名

内 容：

i 2年生神山創造学増設2単位分の実施状況と今後の展開について（報告）

a 「まめのくぼプロジェクト」の実施状況 城西高校神山校 丸山稔
細川和人

b まめのくぼと木育について 鳴門教育大学 尾崎士郎特命教授

c まめのくぼの活用と6次産業化学習 四国大学 安永潔准教授

ii 全体会

a 「まめのくぼプロジェクト」で、生徒に「何を学ばせ」「何を身につけさせる」か

b 地域創生類として、コース（環境デザイン・食農プロデュース）としての具体的取組

c まめのくぼの持つ価値（地域、教育資源としての視点から）

② 成果及び評価

地域との協働による探求的な学びをより確実なものとするため、本年度より増設された神山創造学2単位分の教育内容の充実を図ることができた。カリキュラム開発専門家からは、教育資源としても活用性が高く、今後の景観保全活動や6次産業化学習に対する様々な意見や具体的な取組案をいただくことができ、手探り状態で進めてきた活動に方向性を見つけることができた。

③ 今後の対応と課題

生徒の実態を把握しながら、生徒に「目の前の問題をどう解決するか」といった意識を植え込み主体性を持って取り組む事のできる内容にしていく必要がある。そのために地域を巻き込んだイベントや活動を計画して仕掛けを行い、生徒に失敗を体験させるフィールドとして活動させ、主体的に考えて失敗を乗り越える経験を積み重ね成長させる段階的な教育プログラムを構築していく。

3 地域の生産・交流拠点の創出

(1) 神山小麦の生産・加工

1) 目的

地域でつなぎ難い種を保管し、交換しあえる場所をつくっていくために、昨年度より神山小麦の栽培に取り組んでいる。神山小麦は神山町で70年以上継いでこられた種である。借り受けた耕作放棄地の整備、管理から神山小麦の栽培、加工、販売まで、地域の景観保全と農作物の6次産業化の両観点でより実践的な活動を進める目的とする。

2) 対象生徒

地域創生類1年生

食農プロデュースコース2年生

3) 実施内容

緊急事態宣言の発令により休校措置がとられ、5月後半からの活動となった。



5月28日 収穫と種取り（1年生）



6月9日 収穫（2年生）



6月28日 製粉（2年生）



10月12日 グルテン量簡易検査（2年生）



10月20日 城西高等学校食品科学科見学



11月5日 播種（1年生）



12月8日 焼き菓子試作（2年生）



2月3日 パンづくり（2年生）



2月17日 焼き菓子試作（2年生）



2月17日 神山小麦アンケート実施

4) 全体成果及び評価

5月下旬まで休校措置がとられていたため、実際に現地へ行って小麦の成長過程を観察することができず、LINEのオープンチャットのシステムを使ったオンライン観察を実施した。休校措置が解除後に全員で小麦を収穫できたことはとてもよかったです。

製粉は町内の施設（Food Hub Project）で機械を借りて行った。食農プロデュースコースに在籍する13名が加工チームと栽培チームに分かれ、加工チームは神山小麦の性質を知ることとその性質を生かした加工品作りを進め、栽培チームの7名は神山小麦の栽培や管理にあたった。

本校には保健所の営業許可のとれる施設・設備はないが、地域のパン職人に神山小麦を使ったパンづくりを教わったり、城西高等学校の食品科学科に焼き菓子の製作を依頼して神山小麦の特徴を探ったり、他機関の協力のもと、地域人材や関係機関の施設を活用しながら神山小麦の性質を知る機会を設けた。

5) 今後の対応と課題

6次産業化の実践においては、今後、神山小麦の加工品販売までを視野に入れた地域との連携が必要になってくる。各施設の状況を踏まえた上で、教育活動への展開に向けた協力関係を築いていくこととあわせて、販売に関する運営費用の管理についても検討していく必要がある。

(2) 道の駅の販売活動

① 取り組みの概要

人と物が行き交う「校庭マルシェ」は、昨年度7月に実施したオープンキャンパスでグランドに簡易テント張り仮説の販売所を設け、農業実習で収穫した夏野菜や森林女子部が製作した地元産のスギやヒノキ材を利用した木工商品を販売した。今年度はコロナの影響があり校庭に外部の人を招待するイベントは自粛となり、校内での販売活動は実施することができない。そこで、地域の販売所と連携し日頃生徒たちがこしらえた新鮮な野菜の販売や、課題研究で製作した作品を展示し教育活動を紹介し、展開することとした。

② 取り組んだこと

実施に当たって、(図1)のようなポスターを、1年生が職場体験でイラストレータの実技体験を実施した際に、デザインした。ポスターは「ハーヴェスト2020」で温泉の里神山道の駅で神山校が育てた野菜を販売すると宣伝した。実施したのは令和2年11月28日(土)午前9時から午後2時迄である。当日は天候にも恵まれ、多数の観光客が神山に訪れ道の駅で休憩をするお客様から農産販売物を購入して頂いた。

生徒の感想は、「神農祭も中止になりイベントがこういう形で実施され、最後の良い思い出となつた」「日頃お世話になった地域のみなさんに恩返しができた」「私たちが作った野菜や作品が

多く売れて良かった」「子どもたちとワークショップができた。すごく楽しかった。また来年もいろんなイベントに参加したい」等の意見があった。

来場者からも「高校生が販売していると町が活気づいて明るくなる。是非、毎年やってほしい」「神山校でいろんな教育がされているのに驚いた。学校の様子や、生徒の様子がわかって良かった。」「炊き出しの豚汁が最高だった！ごちそうさまでした」などの意見をもらった。(図2) (図3) (図4)



(図1)



(図2)



(図3)



(図4)

③ 取り組みの成果

1) 繼続が大事

毎年参加しているのは神農クラブ、この組織は神山校の生徒会1年生から3年生の農業クラブ員と家庭クラブ員、森林女子部、防災クラブが3年続けて参加している。生徒会役員は3年連続で販売活動に参加し昨年度までは神山町内のイベントで地域を盛り上げた。地域の声としては「高校生が元気よく大きな声で販売をしている姿を見てこちらも元気が出ます。」「神山校がイベントをして道の駅の販売が盛り上がった」などの声かけをしていただいた。高校生も年1回の活動ですが、この様に地域の方が喜んで頂ける活動を続けてこられたのは、先輩方の地域連携という継続が成果だと感じる。神山校が継続することで信頼を得、信頼されているからこそこの様な販売活動が実施出来る。そんな関係を築くことができているため、この様な関係を崩さないように続けていかなければならない。

2) 1年生の成長

1年生にとっては初めての活動となり、それぞれが販売の役割や販売数の目標を決められ、先輩の動きを見ながらそれなりに一生懸命頑張って取り組んだ。1年生のふりかえりの内容で「先輩のように接客や商品の説明が旨く行かなかったが、時間がたつにつれうまくコミュニケーションが取れるようになり、楽しく活動できた」「子どもと話すのが苦手だったけど子どもから積極的に話しかけてもらったり、質問をしてくれたり有意義な時間が過ごせた」などと言った感想が多かった。また活動の満足度と達成度をABCDで自己評価させたところAを付けていている1年生が多くこのことから販売活動を通して生徒の興味関心の幅が広がり、具体的なビジョンを持てるようになったこと、様々なひとと交流し役立てた経験を通して自己肯定感が

伸びたのだと考えられる。

④ 今後取り組むこと

地域での販売活動は、普段の実習でも野菜を販売するため学校周辺の企業や集合地区に販売実習を行っている。今回の販売活動だけでなく授業や校外学習を通じて多くの経験を積み上げるよう多くの人たちと活動していきたい。また、今回のように校庭マルシェや神農祭での販売が中止になっても地域の交流の支援や販売場所の提供をして頂ける地域連携の関係をさらに深めていきたい。そのために生徒自身が「なにをしたか」「どうすれば商品が売れるか」を考え、生徒自身が自ら販売活動やその他の活動を企画し、関わりを持った人たちと協働することが出来るようにしていきたい。

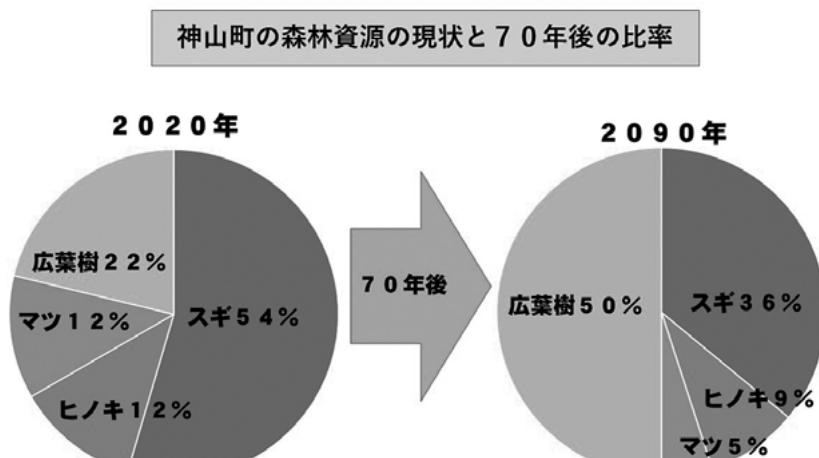
4 地域を学びの場とした実践

(1) 神山町をフィールドとした「森林ビジョン」

① 取り組みの概要

神山森林ビジョンとは、神山町が目指す森林の70年後の姿のことをいう。神山の森林が生態系機能を高度に発揮するため、森林の適正配置と立地条件に応じた整備により、70年後には（広葉樹林+混交林）と針葉樹林の面積比を5対5にすることを目指し、環境保全を優先する場所は「環境林」、木材生産に適した場所は「生産林」と位置づけ、環境林と生産林の面積比を5対5とすることを目指すものとする。（図1）また、生産林の林齢構成を平準化し、若齡林、壮齡林、高齡林のバランスがとれたものにすることを目指すものとする。本校は演習林を管理しており、造園土木科三年生の教科「森林科学」で週2時間林業関係の授業を行い森林環境について学習している。また、部活動として森林の資源の有効活用と林業後継者不足の現状を伝える活動として「森林女子部」が頑張っている。神山町は、町にある環境林と生産林のバランスの良い森林を目指し、鮎喰川の良い水質の継続、森林空間を利用した観光交流、神山杉を使った家作りなど様々な可能性を加えた「神山森林ビジョン」を令和元年6月に策定しており、神山校も様々なプロジェクトと連携し積極的に協力している。以下の取組が、令和2年度に実施した「神山森林ビジョン」に係わる活動である。

- a どんぐりプロジェクト
- b 1年生林業アカデミーオープンスクール体験
- c 伐木講習資格取得講習
- d 森林女子部の取り組み



(図1)

② 取り組んだこと

a どんぐりプロジェクト

平成27年に神山町は「このまま何もしなければ人が居なくなる」という危機感のもと、地方創生戦略として「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定した。平成28年度には、神山つなぐ公社が設立され7つの施策を設定した。そのひとつに「すまいづくり」があり、平成29年度から造園土木科の先輩達が「どんぐりプロジェクト」として、つなぐ公社スタッフの「赤尾さん」、ランドスケープデザイナーの「田瀬氏」などの多くの担当者の皆さんと、本プロジェクトを進めてきた。どんぐりプロジェクトは、神山町の広葉樹を種から繁殖させ神山校で生育させ集合住宅や、新しく計画される学校や寮に定植していくプロジェクトである。

現場施工は令和元年（5月31日、6月6日、7日、21日の合計12時間）、令和2年（6月16日、17日、23日、24日、7月1日の合計15時間）と歴代の先輩から引き継いで2期目の住宅設計チームの一員として、植栽、施工を行った。また、土木施工業者の昇旭建設さんと造園業者の森田緑化さんらも専門人材に加わっていただき、総勢30人で取り組んだ。（図2、図3）

結果及び考察として、「植栽、施工、管理」までの一連の作業を計画通り進めることができた。特に、測量や植栽の工事では、学校での授業の成果が生かせた。鉢上げ後の苗木の生育も順調で次回の植栽工事に引き継いでいきたい。本取組がこの神山地区の景観作りのモデル事業となることを期待している。

今後の課題として、今年度担当した3年生の施工工事は、無事に計画は完了したので、今後は、後輩の皆さんに順次、第3次住宅地の植栽整備、管理作業を託すこととなっている。

生徒の感想として「先輩から引き継いだプロジェクトを最後まで完成させたことが嬉しい」「神山の樹木の種から4年間掛けて育てた既存樹木の移植は、大変だったけど卒業しても神山の集合住宅に見学に来たい」「プロの職人さんと一緒に仕事ができて貴重な実習体験となった」など多くの経験と技術が身についていたことをすりかえりシートに記入していた。

おわりに、本プロジェクトは、平成29年度から継続して取り組んだ。関わっていただいたランドスケープデザイナーの田瀬氏をはじめ、神山つなぐ公社の集合住宅設計チームと本校生徒が力を合わせた取組となった。生徒が得た成果として、どんぐりなど鮎喰川流域の在来種の種取りから育苗、植栽、管理までの一連の流れを行い、これまでの造園土木科の授業・実習での学びを生かす場となった。そして、普段、目にすることが少ない建築業や造園業の職人の技も間近で体感できる機会を得たこと。また、プロジェクトを通して地域景観の成り立ちを学ぶ機会にもなった。今年度は、現場で竹垣を施工し、植栽整備に参加し、どんぐり等の苗木を後輩たちに引き継ぎ、作業をつなげていきたい。



(図2)



(図3)

b 1年生林業アカデミーオープンスクール体験

徳島県では全国に先駆け、平成17年度から「林業プロジェクト」を展開した。高性能林業機

械の導入により、木材の生産性が大幅に向上し、若者を中心に林業従事者が増加するなど、徳島県の林業は着実に活気を取り戻している。こうした成果を基に、県は県材産を増産する目標を掲げた「新次元林業プロジェクト」を平成28年度に開始した。「新次元林業プロジェクト」は、現場の即戦力となる人材を育成する「とくしま林業アカデミー」を開講した。「とくしま林業アカデミー」は毎年8月に設置のねらいや研修の状況、今後の期待について、徳島県林業戦略課の方がオープンキャンパスを開講している。本校も神山町が森林ビジョンで描いている後継者不足の解消に向け林業アカデミーを推奨している。

城西高等学校神山校は、演習林が有り、森林の授業や総合実習で間伐体験や、集材作業を実施している。また、2年生には造園土木科が伐木責任者、チェーンソーの資格取得を行っている。こうして林業体験を行い林業従事者への道もあることを伝えるなど、進路選択の幅を広げるため1年生がオープンキャンパスに参加している。(図4)(図5)

結果と考察として、神山校から先輩が2人、林業アカデミーを卒業し、林業関係の職場で即戦力として活躍している。進路希望調査をとっても2年生が2名、1年生が2名、林業関係の仕事に就きたいと意欲を示している。また、課題研究のテーマを決めるとき、木工作品を作りたいと希望した生徒が18人中9人も手を上げ、木に関係したテーマを設定する生徒が50%もいることに驚いた。先輩が、木で何かものづくりをしているのを見て、興味がわいて来ている。自分でもできると感じている生徒が増えてきているのも現状である。

今後の課題、「林業の未来には若い力が必要」、アカデミーは林業を志す若者たちの就職先となるのが、県内の森林組合や林業関連会社、育林から伐採まで、会社によって事業内容もさまざまであり、継続性がない。「山に入ると、伐採期を迎えた木でびっしりと埋め尽くされている状態となっているそのため、木材生産量の増産を実現するためには、新しい担い手の力が欠かせない」と話す林業会社の経営者もいる。「業界内では、新しい人材を求めている企業が多くあるが、ある程度の基礎知識を持った新人が入社してくれるのは本当に有り難いこと。機械を扱うための資格取得や、安全性への配慮などを学ぶことができる林業アカデミーの存在は、今後ますます重要になるはずである」という意見もある。



(図4)



(図5)

c 伐木講習資格取得講習

林業における労働災害の60%は、チェーンソーを用いた伐倒作業中に発生している。いずれの作業でも作業に着手する前の準備は大切だが、特に伐木造材作業では、林分の状況、地形などの作業条件を把握することが極めて重要である。こうした、林業の作業知識を十分に把握し、定められた規則を的確に守る目的で、毎年、2年生が徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の協力の基、学科2日、実技講習1日の合計3日間に渡る講習を受講している。(図6)(図7)

結果と考察として、服装と保護具の重要性を学んだ。安全の第一歩は、服装からとも言われ安全で清潔で身軽なものを使用すること。特に山の作業なので派手で目立つカラフルな色が最

適であることを学んだ。作業道具の準備も重要で、林業作業を行う前には、作業を行う林分の事前踏査やその結果を踏まえて、必要な作業道具をそろえておくことが大切である。使ったら元の位置にかたづけるという心構えが重要である。また、悪天候時の作業では、強風、大雨、大雪などの悪天候のため危険が予想されるときは、作業を中止すること。労働安全衛生法規則第483条に「悪天候時の作業禁止」と記載されている。緊急連絡体制も災害発生時等の緊急時における体制の整備、確立を図ること。熱中症予防対策、火災要望対策、ハチ刺され要望対策、危険な毒中植物や野生動物に十分認識を持って伐木作業を行わなければならないことをこの講習で学んだ。

今後、学校林での安全な作業確保のためこの講習を継続していく必要がある。引き続き、徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の連携が不可欠となる。



(図6)



(図7)

3年生は、林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合が協働で、高性能林業機械の操作方法を、学校林や神山町の県有林で作業体験を森林専攻生や環境コースにさせていただいている。山林で、伐倒・木寄せ・造材を行うハーベスターや、玉切りにして運搬車に乗せるプロセッサーと運搬するフォワ・ヤーダーの運搬操作を体験した。現場では、高性能機械の作業工程の留意事項や高性能林業機械を用いた作業システムについて指導を受けた。チェーンソーによる伐採方法では、小系木の伐採方法について間伐材を使って実際に倒木した。

結果と考察として、大型の高性能林業機械の操作は学校の演習林では体験ができないので、学校にとっては貴重な体験としてとらえている。生徒も「良い経験になって、すごく楽しかった」といい感想があった。集材作業も、機械なので目的の場所に楽に設置でき、安全で安心して作業ができるに感動していた。(図8) (図9)

今後の課題として、学校林での実習は倒木や間伐が容易にでき、安全な実習地が確保でき、役場の方や県の林業関係者の方も良い場所と推奨してくださり、演習林の良い有効活用となっているが、実際に木を運び出すとなると、容易に集材できない、現在は1m程度の丸太にして人力で運んでいる。こうした集材作業が今後の課題となり、支援や助成してもらいたいところである。



(図8)



(図9)

d 森林女子部の取り組み

森林女子部は、徳島県内の林業後継者を増やし地域の林業活性化や学校活動のPRを目的で立ち上げたプロジェクトチームである。これまででは、徳島県木材利用創造センターや、徳島県林業関係者や森林保全に取り組んでいるNPO団体及び行政関係者に対しSDGs推奨に係わるプレゼンテーションを行い地域の環境問題にも定義を発表する活動を行っている。森林女子部は様々な機会をとらえ、このSDGs17項目の基礎となる「グリーンライフ」の一つである山の働きの持続可能な取組に協力していることを伝えた。森林は水源の元となり、台風時は、大雨で河川の氾濫や増水で家屋の浸水という水害の原因となり、日常生活に大きな影響を及ぼすことを伝えることができたのは成果として評価ができる。そのために、私たちは、学校林で間伐や除伐等の正しい木の伐採方法を学び、伐採した跡地に針葉樹ではなく広葉樹を植えていく活動を継承していくことが、森林ビジョンとの取組に結びつくと考える。

今後の課題として、まだまだ国連が目指す30年後の持続可能な取組について高校生がどれだけ理解しているかまだ未だ未知の世界である。今後この取組を浸透させ理解していく必要がある。次に、神山町が目標としている70年後の森林ビジョンを1年1年つないでいくことが大事であるととらえた。(図10)

森林女子部のもう一つの活動として本年度は、募集活動の一環としてオンライン発信による全国の中学生に神山校の学校案内や、特色ある部活動の紹介や、地域ぐるみで生活している学生寮「あゆハウス」の取組みを発信した。7月には、地域みらい留学全国合同説明会があり、東京・愛知・兵庫・神奈川などの中学生がオンラインで参加した。(図11) 参加した中学生は来年神山校を希望するため積極的に参加していた。中学生からの質問からは「森林女子部なのになぜ男子がいるの?」「今行っている活動は?」「部活で一番楽しいことは何?」など、積極的に質問をしていたのが印象に残っている。また、9月には神山町主催で行われた「神山地域留学2DAES」があり県内外の中学生が、1泊2日で5組、神山を訪れる学校や寮や町内を見学に訪れた。体験活動では森林女子部と神山スギを使ったスマホスタンドを中学生とデザインし制作した。(図12) 思い思いのデザインを描き高性能レーザーカッターで作品を仕上げてお土産として持って帰った。今年度はコロナの中、多くのイベントや活動が制限されPRも十分に実施することができなかった。そんな中でも徳島県主催の木づかいアワード2020活動部門で準グランプリを受賞した。徳島県も森林女子部の活躍を評価し応援して頂いていることが証明できた。今後も神山町の林業活性化と林業後継者不足の解消に努めPR活動を積極的に行っていく。(図13)



(図10)



(図11)



(図12)



(図13)

③ 取り組みの成果

神山町の山は、かつて林業が盛んであった頃、先人達が子や孫を想い、将来ために材としての木をたくさん山に残してくれた。一方で、少子高齢化や雇用場所の減少による都市集中化などの影響で神山町の人口減少や林業の市場を取り巻く環境が変わっている。こんな中で、林業の仕事だけで山を考えることはどうかという話も聞く。当時の選択について否定するつもりなく、今だから気づけることもあると思う。生徒達によく問うのは、「今を生きる我々にできるのは、これらをどうとらえてどう将来に残していくのか」、「神山町では、今の山をよりよく将来に残して行くため、今後、山とどう向き合っていきたいと考えていくか」と質問する。生徒は「今ある知識だけで考えず、山がもたらす周辺環境への多様な影響、資源としての可能性など、将来を見据えどのような山が神山町にとって望ましいか、視野を大きく広げいろんな大人の意見や、高校生の意見を共有し、考えることが大切だと思っています。」と言う。みんな献身的な前向きな意見が出た。そのための第一歩として、この城西高等学校神山校と神山町の「森林ビジョン」との連携は、現在、山に携わる様々な人に合い森林機能の現状を把握し、山で働くそれぞれの視点からの話を聞くことで、山について新しい気づきが生まれる場になればと考えている。



(図14)



(図15)

④ 今後取り組むこと

新たな森林ビジョンの連携として令和3年度は、森林の生育に関わる神山町の山や川の調査を計画している。人工林と天然林の土壤に影響する光の強さと光合成速度や温度と林木の生長と水の循環について専門的な立場の指導を得て学習して行く。専門的経緯のある大人から学習意欲や、課題に向かうプロセスを評価してもらい生徒、一人一人に自信を付けさせることが3年目の展望だと考える。

神山町の林業活性化協議会は「神山町バイオマス利用促進協議会」を今年度、新たに立ち上げ、神山町の燃焼機械導入状況調査を実施している。本校もこの調査に協力している。町は、国の山村活性化支援交付金を活用して木質バイオマス利用促進の取組を行っており、その一環として燃料機械導入の現状調査を神山町の公共施設や団体企業・民家等に調査を先駆けて実施している。

将来的には、現在使用しているボイラー・ストーブ等の燃料機械の使用から神山産の木質バイオマス燃料を促進させ、限られた燃料資源の分散利用に協力し持続可能なSDGsの推進に協力していく目的で、今後も城西高等学校神山校も神山町森林ビジョンと連携を図り、全国のモデル校となれるように頑張っていく。

さらに、徳島県農林水産部は「徳島木のおもちゃ美術館（仮称）」を板野町にあるあすたむランドに設計中である。この美術館は、赤ちゃんから高齢者に至る全世代の県民が「徳島の木の良さ」を再認識し、その魅力をまるごと体感できる「新たな木育拠点」として、徳島県立あすたむランド内の四季彩館を全面改修して整備するとともに、くつろぎ館（食堂）の改修やあすたむランド入口から美術館までの遊歩道の整備なども合わせて一体的に整備し、あすたむランド開園20周年記念事業として来年度秋頃の開館を予定している。そこで神山校も徳島木のおもちゃ美術館が学習成果の発表の場になる計画を企画している。神山における木育活動の期待を背負って引き続き地域連携に力を入れていく。



(図16)



(図17)

(2)-1 耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」栽培活動

① 取り組みの概要

活動2年目の今年、5月までコロナの影響で休校措置で生徒たちが小麦の生長過程を観察できず、LINEのオープンチャットという、システムを使い、小麦の生長の様子や圃場管理の様子など週2回のペースで生徒たちに配信を続けました。6月から本格的に授業が再開し活動が始まりました。6月初旬には昨年12月に播種した神山小麦の収穫作業、脱穀、選別、製粉作業を行いました。加工（調理）については、本校の食品科学科にも協力いただきながら進めました。9月からは、小麦収穫後の後作にソバの栽培と今年度は、小麦の耕作面積を増やして栽培活動に取り組みました。食農プロデュースコース2年生13名が中心となり活動を進める中で、商品開発（加工）と栽培活動を両立するには、作業量が多く効率的に活動が進まないことから、加工グループと栽培グループの2つのグループに分かれて活動を進めました。ここでは、栽培グループの活動について報告します。

② 取り組んだこと

- a 休耕期間中の耕作地まめのくぼ様子
- b 昨年度の神山小麦の収穫作業
- c 神山小麦の脱穀、選別作業
- d ソバの栽培活動
- e 2年目の神山小麦の栽培活動（栽培の準備作業、草刈り、耕耘、播種など）
- f 獣害対策（木柵の設置）
- g 獣害対策（電柵の設置）
- h 小麦播種後の管理作業（麦踏み、除草など）

a 休耕期間中の耕作地まめのくぼ様子



休校中の職員による管理作業

耕作地の水没事故では、田植えの時期と重なり山間部の水田用の水路に水が流れたことで、棚田の水路にも水が入り、水路が壊れていたこともあり、耕作地に流れ込んだ現状であった。これも職員で修復をおこなった。



b 昨年度の神山小麦の収穫作業 6月9日に実施



まめのくぼ耕作地約5アールでの小麦収穫作業



学校圃場2アールでの小麦収穫作業

令和元年12月中旬に播種した小麦で、活動初年度だったことから、耕作放棄地の準備に時間を要し、播種時期が遅れてしまったが、冬季の気候が比較的温暖だったことから順調に生育した。休校措置も解除になり生徒たちが収穫作業を体験できたことはよかったです。学校圃場には、耕作栽培地による比較対象として2アール程度栽培した。

c 神山小麦の脱穀、選別



小麦刈り取り後の脱穀作業
脱穀機は地元企業から協力で実施。
脱穀、選別後約50kg収穫した。



電動選別機で一次選別



手作業で二次選別作業を実施。



脱穀直後の小麦

d そばの栽培活動（地域の在来種をつなぐため神山町上分竹内さんから提供）



地域の竹内さんから提供のソバ種



約2アールの耕作地に播種

ソバの播種準備が悪天候で遅くなり、9月中旬の実施となった。地域では8月中旬に実施しており、生育の心配をしていたが、草丈30~40cmまで生育したが獣害対策が遅れたことで食害にあい全滅してしまった。念のため学校園場にも2アール栽培しており、来年度の種を確保することはできた。

e 2年目の神山小麦の栽培活動（栽培の準備作業と播種）



草刈り機で草刈り作業



草刈り作業の様子

休校措置もあったことで、十分な管理作業の時間も確保することができず、1年間、手をかけてない耕作地は、元の放棄地状態にもどってしまい、雑草セイタカアワダチソウなど、3mを超える草丈となり、生徒たちは雑草と格闘しながら作業を行った。



草刈り後乾燥させて野焼きを実施



土壤改良のため石灰の散布



約8アールの耕作地に石灰全面散布



約8アール耕作地の耕耘作業

今年度は昨年の5アール耕作地の他に、下の段耕作地約8アールを耕作できるように圃場管理し、栽培面積を増やして活動に取り組みました。草刈り作業など圃場整備は本当に大変でしたが、生徒たちも熱心に取り組み順調に準備が進みました。



11月6日に第1回目の播種
2年生による手まきで小麦の播種作業



1年生地域創生類による第2回目の小麦播種作業説明の様子。



播種機を使っての播種作業
(約5アールの耕作地で11月18日に実施。)

一昨年、約70年繋いできた神山小麦を地域企業（フードハブプロジェクト株）から提供していただき、昨年から栽培活動を進めている。今年の6月に収穫し脱穀、選別後、50kgの小麦を収穫した。今年はこの小麦を15kg種小麦として播種した。

f 獣害対策（木柵の設置）

神山小麦の播種後、9月中旬に播種したソバがシカの食害を受けて全滅したことから、神山小麦を獣害から守る対策が必要であった。生徒たちと話し合い学校の資材を使って頑丈な木柵をつくることになった。当初はいろんなアイデアがだされ、金網を張る案、おおきな溝を掘る案などがでたが、学校の資材を使うことや、なるべく経費をかけないこと、また、この棚田の景観や自然環境を壊さないことを条件としたことから、学校の演習林の樹木(間伐材スギの木)と地域からご協力いただいた竹を使って頑丈な木柵を作ることに決まった。しかし、この木柵の作製と設置は大変な作業となった。頑丈な柵を作ることから、シカやイノシシに押されても壊れない柵。支柱に使った間伐材は直径20~30cm前後、長さ4m。約4m間隔で支柱として間伐材を用い、土中に埋め込む深さ約1m。直径30~40センチの穴を28か所、機材が入らないため手堀でスコップ、ショウセンで掘って設置した。悪天候で設置に約1か月要した。



演習林から切り出した間伐材の一部切り出しへ、
造園土木科3年生。



埋め込む穴堀の様子



埋め込み穴 深さ約1m



番線で竹と間伐材を結束



木柵の設置作業途中



土どめで間伐材スギを支柱に埋め込んだ様子



木柵の完成



木柵の完成

木柵は、12月17日に完成した。設置作業を進めるなかで、竹材については孟宗竹を丸太の状態で間伐材に番線で結束したが、その際、番線を占めすぎて割れたり、破損したことで、竹材

の強度が心配である。また、雨、風の影響で強度は1年程度と考えられる。様子をみながら補強や改善をすすめたい。また、木柵を設置していない北側は、石垣となっており、下の耕作放棄地から段差2m程度の高さがあるが、シカやイノシシが侵入する恐れが十分考えられるので、木柵で周りを囲む状態に設置すること計画した。

g 獣害対策（電柵の設置）

獣害対策を考えるなかで、新しい電柵の設置案もあったが、当初は購入予算もなく、木柵で対応することを決めたが、野兎などの小動物への対策は十分ではなかったことから、学校や県の行政機関にもはたらきかけことで、ご協力いただき1月に電柵の購入が認められた。電柵の購入が認められたことを生徒たちに伝えると、大変喜び、あの穴掘りから解放されたことと、より厳重に細部まで獣害対策ができることで安心した様子であった。電柵の設置は、令和3年2月2日に設置を完了することができた。



電柵の機械本器設置の様子



電柵支柱のポールを3m間隔で設置

h 小麦播種後の管理作業（麦踏み、除草など）

電柵を設置後、下の写真は2月9日の麦踏み作業と株間に生えた雑草の除草作業の様子であるが、この麦踏み作業だけは、栽培の過程で必要な栽培技術であることを学んでいる生徒たちも不思議な感覚で作業に取り組んでいた。



麦踏みの様子



株間の除草作業の様子

③ 取り組みの成果

まめのくぼで神山小麦を繋いでいく栽培活動は、これから食農プロデュースコースの中心的な活動になる。昨年から活動が始まり、今年で2年目となった。神山小麦を栽培し、これからもしっかりと種を繋いでいく活動であることは、生徒たちも理解している。今年は、休校措置があり、昨年生徒たちで播種した神山小麦を生徒たちで収穫することができるのか本当に心配していたが、5月に解除になり、収穫作業が生徒たちの手で行えたことは大変ありがたいことであった。生徒たちも収穫を楽しみにしていた。休校措置の間、生育の様子をオープンチャットを使ってオ

オンライン学習したことで、学習活動が途切れず生徒たちが小麦の生育状況や耕作放棄地の状態に、興味や関心を持った生徒がいたことは学習の気づきや体験の振り返りなど、これから活動の大きな成果となるはずである。また、まめのくぼは、「棚田」の景観で、傾斜地に段々状の田んぼや畑が作られている。この特別な自然環境で栽培活動を進めることで、景観の復活や「棚田」の保全をすすめる意義ある活動として取り組みたい。



小麦の様子草丈40cm
3月11日現在



食農プロデュースコース13名

④ これからの取り組み

耕作放棄地まめのくぼは、我が校のこれからの貴重な学びの場となる。地域からも大いに期待されており、周辺の環境整備から栽培活動を通して、耕作放棄地の復活モデルとして魅力ある活動を進めたい。しかし、2年目の活動がはじまったばかりで、栽培活動の観点から見てもやるべきことが山積している。現在、2カ所の耕作地を圃場整備し栽培に取り組んでいるが、その周りの耕作放棄地は草刈りのみの状態であり、歩行することにも困難な状態である。夏季の景観は、「棚田」にはほど遠く、雑草が生い茂り、区画の区切りが分からぬ状態で、まさに耕作放棄地である。今年こそ、「棚田」の全体景観を取り戻すなかで神山小麦とソバの栽培サイクルを確立させ栽培活動に努力したい。

(2)-2 耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」石積み研修

① 取り組みの概要

神山町の農業後継者は少子高齢化に伴い、町内の耕作放棄地は荒れ果て増えていく一方である。本校の近所にある谷地区の「まめのくぼ」という場所が、水田や果樹・お茶などの農作物を栽培していたが耕作放棄となっている。昨年度よりこの土地をお借りし、まずは神山小麦を栽培することにした。神山小麦は神山町で70年以上継いでこられた種である。神山小麦を栽培、加工、販売しているフードハブ・プロジェクト（神山町の企業）と連携を図りながら、6次産業化の視点も取り入れた実践的な学びが可能になるとを考えたプロジェクトが「まめのくぼプロジェクト」である。耕作放棄地の整備、管理から神山小麦の栽培、加工、販売まで、地域の景観保全と農作物の6次産業化の両観点でより実践的な活動が可能になると考え、令和2年度より取り組んだ。30年以上放棄されていた農地は水害や鳥獣被害や天災で作物を育てる環境ではなかった。学科が再編となり2年目を迎える今年度は地域創生類1期生が2年生となり「環境デザインコース」「食農プロデュースコース」の両コースに分かれまめのくぼプロジェクトを神山創造学Ⅱの年間教育カリキュラムに位置づけ実施することになった。環境デザインコースは、本年度より本格的に石積みの修復に取り掛かり食農プロデュースコースが栽培する神山小麦の畑の周りの環境整備に取り掛かることとなった。

② 取り組んだこと

a 神山創造学石積み実習

神山創造学Ⅱ A は環境デザインコース16人でまめのくぼプロジェクト環境整備、石積みを行った。元々、水田だった地区は石で棚田が形成されていた。耕作放棄地となった今は石がふくらみ危険な状態となっていた。場所によっては石組みすらなされておらず、天端の部分だけコンクリートが張られているだけで、風通しの悪い田んぼとなっている。加えて排水溝も草や土砂が崩れ水路の姿が消滅している。こうした状況を解決するため高校生の力で、修繕を行った。



(図1) 基礎石を敷く床堀の様子



(図2) 基礎石の裏に盛り土行う様子



(図3) 裏栗石を詰める作業



(図4) 石積みの高さは1m 幅20m

b 石積み研修

2月9日・10日の2日間、地域創生類第1学年を対象に石積み研修を行った。講師にNPO法人石積み学校の金子玲大さんを出前授業の先生としてお願いした。先生は、徳島県上勝地区で地域おこし協力隊で石積みを学び、現在は全国の石積みの景観を修復する目的で若者に石積みの技術を教えている。今回は1年生に石積みの基本的な積み方や道具の名称や作業上の注意事項を学んだ。石積みの基礎はまず床掘りでこの作業が石積みの8割をしめいかに重要で大切な作業であることを強調していた。次に石の動かし方で、石を動かすときは基本、石を持ち上げてはいけない。石を転がすという、腰に負担を掛けないためである。基礎石から順番に床掘りをしている場所に1石1石据えていく。据える石の下には敷石を敷き、その裏には裏切石を詰め土で埋め戻し、突き棒でしっかりと突く。そうすると頑丈で丈夫な石積みが仕上がる。高さ2m位で天端石を据える。天端石は比較的面が平らな石を選択するのがコツと説明する。作業は1年生30人を15人と15人の2つのグループに分け前半の9日目は床ぼり作業と基礎石の施工を行った。10日目の15人は初日の仕上げ作業を行うチームと栗石に分けるチームに別れ作業を分担して行った。実技をしながらの研修ということで短い時間での学びの場となったが充実した内容の研修となった。



(図5) 講師：石積み学校の金子玲央さん



(図6) 石の持ち方を聞く生徒の様子



(図7) 基本の床掘り作業を学ぶ様子



(図8) 1石1石丁寧に基礎石を据える



(図9) 石の裏に詰める栗石



(図10) 石積み工事に使う道具



(図11) 2日目も丁寧に持ち方を教える金子さん



(図12) 天端作業を行う生徒の様子



(図13) 仕上がりを見る生徒の様子



(図14) 完成！

③ 取り組みの成果

1年生

石積み研修は、2年生になりまぬくぼプロジェクトに置いて、環境コースが主力となり施工していく。また食農コースも石積み施工を行った畑で小麦を育てる上で畑の構造や排水を学ぶ上で重要である。基礎的な技術指導を金子先生から教わり、石積みはなぜ行うか、効果はあるのか等専門的な知識を学ぶことができた。

ふりかえりの場面では、いくつかの疑問や質問事項が次のように出された「ぐりいしの漢字は?」「コンクリート部分の擁壁と石積みの違いは?」「いい石積みとは?」「石積みの面白いところは?」「なぜ? わき石をするのか?」「石積みはなぜ石なのか?」「石に青い物があるのか?」「石積作業でお金は稼げるか?」「石積みのメリットや役割は?」「石積みの歴史について?」など沢山の質疑が出た。金子さんは1問1問わかりやすく説明していて、生徒は理解できていた様子だった。

感想としては「いろいろ自分で考えて石を選び石積みのことを知ることができた」「じいちゃんの家でも石積みをしているので手伝ってあげたい」「作業は大変だったけど完成したときはきもちがいいなあと思った」「石を重ねて行くにつれ石を置く場所が分からなくなってきた」「石積みを行う人が減少傾向にあることを知り、多くの人が石積みを習ってほしいと思った」「昔ながらの積み方が長持ちして丈夫であることが分かった」「床掘りは後ろを深く掘り石のお尻を下げて据えていくその間に次の石を据えていく」「他の学校では体験できなかったことを学べて非常に良かった」「石を持つときは足を広げてへその上で持つのが正しい」「三角形の隙間は大丈夫だけど四角形の隙間はずれやすいので良くない」「小さいときに石を積んで遊んでいたので石を触るのが楽しかった」などの感想が多く出て、それぞれ生徒が感じたことが成果となっている。

2年生

2年生は昨年度も金子さんの研修を受けており2回目となる。しかしながらまだまだ石積みについて詳しく学びたい環境デザインコース16名が、よりレベルの高い施工技術を習得しようと真剣に取り組んでいた。6月からまぬくぼの石積み修復で、自分たちが材料である石を運び、玄翁で栗石を割り、教わった積み方で石を並べてきた。高さは1m程度とさほど高くはなく傾斜地でもないため容易に安全に作業を行うことができた。しかし長さが20mもあり今年度中に完成するめどが立っていない。

成果と言える生徒の感想では「石の持ち方や、形の選び方、一つ一つの石の役割が理解できた」「石積みは見た目の芸術性がありコンクリートの壁と比べたら周りの自然とは不釣り合いであることが実感できた」「完成に近づくと楽しさや面白さが感じられるようになり途中ではあるが達成感を感じる作業であった」「1年生の時と比べて確実に上達していると自己評価した」など肯定的な感想が多く否定する生徒はいなかった。この結果から2年生のコース選択は自分から進ん

で選んでいるという気持ちが伝わり、自分の好きなことがやれているという結果につながったことが成果と言える。



(図15)



(図16)

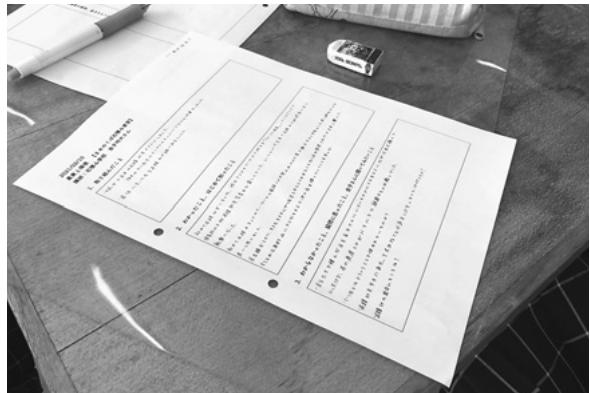
④ 今後取り組むこと

耕作放棄地まめのくぼは、課題研究や神山創造学を中心に実践実習の学びの場として活用してきた。道の除草作業を行ったり、水路を修繕したり、周りの環境整備にも貢献している。地域の方からは「道の草を刈ってくれてありがとう。感謝しています。」とお礼の言葉もいただく場面があった。今後、環境デザインコースはまめのくぼ地区の石積みを完成させ景観を良くし観光地として人が集まり、耕作放棄回収のモデル地区として広報ができるれば、地域にとっても神山校にとってもPRに繋がっていくことが期待できる。

また、神山森林ビジョンの目標である広葉樹50%を達成していくため、まめのくぼ周辺のスギ・ヒノキの人工林を間伐し環境のバランスを考えながら調和の取れた森林体系にしていく活動を初めて行く。今後、神山創造学以外の専門科目「森林科学」「農業と環境」の専門科目や、普通科目や普通科教員にもまめのくぼという教材を活用し他教科にまたがる教育活動が実現できるよう、カリキュラム開発も視野に入れ進めていく。



(図17)



(図18)

Ⅲ コンソーシアム会議

1 コンソーシアム会議について

○第1回コンソーシアム会議

日 時：令和2年10月31日（土） 午後1時から午後3時30分まで

会 場：徳島県立城西高等学校神山校体育館他

参加者：神山校教職員17名、地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー（順不同）

	所 属 名	職名・氏名	分科会
1	徳島県教育委員会学校教育課	高校教育担当指導主事 寒川由美	①
2	徳島県立城西高等学校（神山校）	校長 阿部 隆	①
3	一般社団法人神山つなぐ公社	代表理事 杼谷 学	④
4	鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻	特命教授 尾崎士郎	④
5	徳島大学大学院社会産業理工学研究部	教授 鎌田磨人	④
6	NPO グリーンバレー	竹内和啓	②
7	フードハブプロジェクト	白桃 薫	③
8	Sansan 株式会社	辰濱健一	②
9	神山町林業活性化協議会	理事 高橋幸次	④
10	神山町下分保育所	所長 山口准子	③
11	神山町広野保育所	所長 林美智代	③
12	神山町広野小学校	校長 寺奥幹生	①
13	神山町神領小学校	校長 楠 達也	①
14	神山町神山中学校	校長 高橋敬治	④

カリキュラム開発等専門家（順不同）

	所 属 名	職名・氏名	分科会
1	四国大学	准教授 安永 潔	①
2	徳島県教育委員会学校教育課	キャリア消費者教育担当指導主事 中川 望	②

内容：全体会

- (1) 本年度プロジェクトチーム会議について
- (2) 地域みらい留学オンライン説明会と2daysについて
- (3) これまでの本校における事業の取組について
- (4) 令和元年度コンソーシアム会議分科会振り返り

分科会

- (1) キャリア教育の取組状況と課題について（体育館）
- (2) 本校教育活動における有効的な広報戦略について（被服室）
- (3) まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開（視聴覚室）
- (4) まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開（柔道場）

○第2回コンソーシアム会議

日 時：令和3年1月22日(金) 午後1時から午後3時30分まで

会 場：神山町農村環境改善センター大ホール他

参加者：神山校教職員15名、地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー（順不同）

	所 属 名	職 名 ・ 氏 名	分科会
1	徳島県教育委員会学校教育課	高校教育担当指導主事 寒川由美	①
2	徳島県立城西高等学校（神山校）	校長 阿部 隆	①
3	神山町	町長 後藤正和	③
4	一般社団法人神山つなぐ公社	代表理事 枝谷 学	④
7	鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻	特命教授 尾崎士郎	④
8	大正大学地域構想研究所	阿南支局長 鈴江省吾	④
10	Sansan 株式会社	辰濱健一	②
12	神山町林業活性化協議会	理事 高橋幸次	④
14	神山町神領小学校	校長 楠 達也	①
15	神山町広野小学校	校長 寺奥幹生	①

カリキュラム開発等専門家（順不同）

	所 属 名	職 名 ・ 氏 名	分科会
1	四国大学経営情報学部	准教授 安永 潔	③
2	徳島県教育委員会学校教育課	キャリア・消費者教育担当指導主事 中川 望	②

内容：全体会

(1) 課題研究発表会の感想・振り返り

分科会

(1) キャリア教育の取組状況と課題について

(2) 本校教育活動における有効的な広報戦略について

(3) まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開

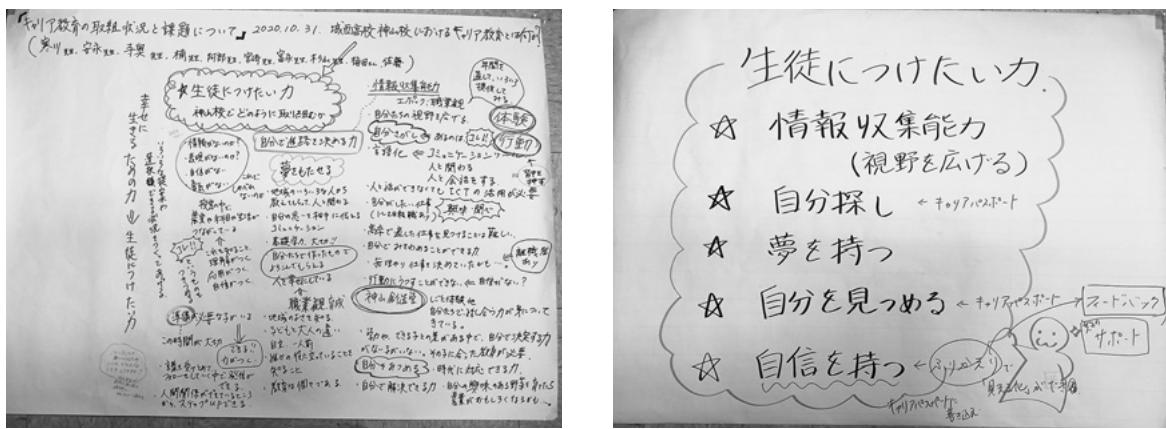
(4) まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開

① キャリア教育の取組状況と課題について

【第1回分科会】

「城西高校神山校におけるキャリア教育とは何か？」をテーマに協議を行った。中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義しているが、これまででは「職業観・勤労観の育成」のみを重視し過ぎていた面があった。昨年度のコンソーシアム総会の分科会において、「職業選択は『手段』であって『目標』ではない。生徒が人生を送る中で幸福感や楽しさを感じ、生涯にわたり充実した生活を送れるようにすることが大切」であるという意見が出された。そこで、第1回の分科会では「生徒につけたい力は何か。それを神山校でどのように育むか」について参加者で話し合った。

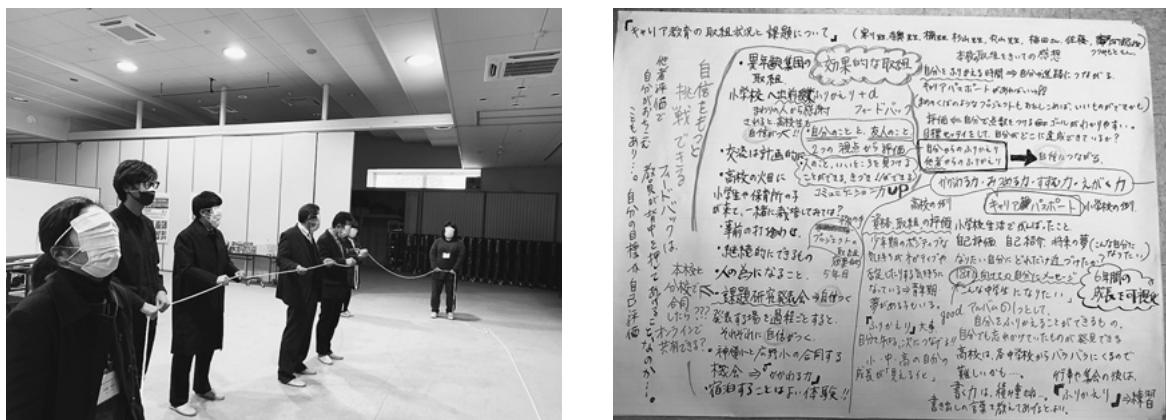
下図のようにたくさんの意見や提案をいただき、「情報収集能力」・「自分探し」・「夢を持つ」・「自分を見つめる」・「自信を持つ」ことを生徒に身につけさせたい力とした。これらが生徒に育まれることで「幸せに生きる力」の育成につながると考えた。



【第2回分科会】

はじめに、丸山稔指導教諭による「ブラインドスクエア」を、分科会参加者に対して実施した。フロアで目隠しをし、1本のロープを使って7人で協力しながら四角形を作るという体験活動を行った。活動を行う上で自己紹介やアイスブレイクを取り入れた。生徒と同じ体験をすることで、「神山創造学」で行われている学習活動を共有した。

その後、前回の分科会では時間の都合上で話し合いができなかった「生徒につけたい力を育むための効果的な取組」について協議を行った。下図のように今回も非常にたくさんの意見が出され、意見を共有することができた。その中で「キャリアパスポートの活用」・「異年齢集団との関わりを通して自信をつける」等について、今後さらに充実させていくことを共通認識できた。



② 本校教育活動における有効的な広報戦略について

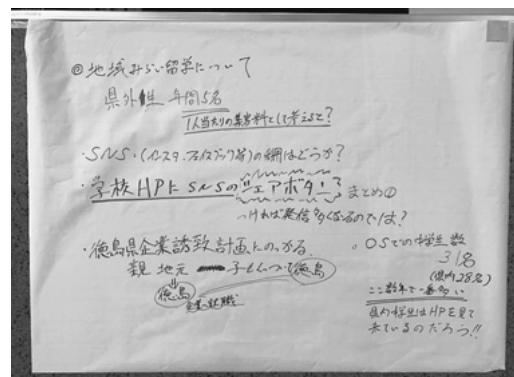
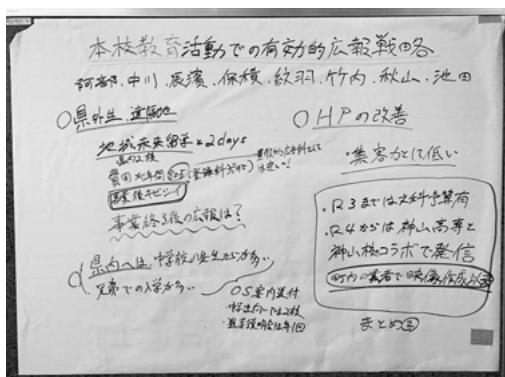
【第1回分科会】

県外及び遠隔地の生徒募集について及び学校ホームページの有効的な広報について話し合いをおこなった。

県外や遠隔地からの入学生は順調に増えている。「地域みらい留学」に加盟している効果であると考えられるが、登録料が高額であり、今後このまま登録を続けるか検討が必要であると思われる。県外募集5名に対してはコスト的にはどうなのかと考えられるため、他の募集方法を新たに開拓した方がいいのではないか、という意見が出た。

学校ホームページについては、どこの学校も同じに見えてしまうという意見が聞かれ、本校の特色を出す必要がある。

他職種のメンバーの方から貴重な意見を聞くことができ、大変有意義な会となった。

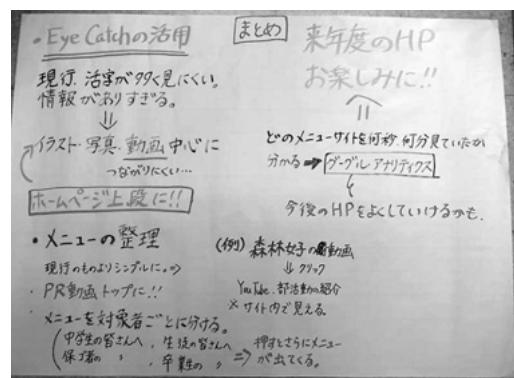
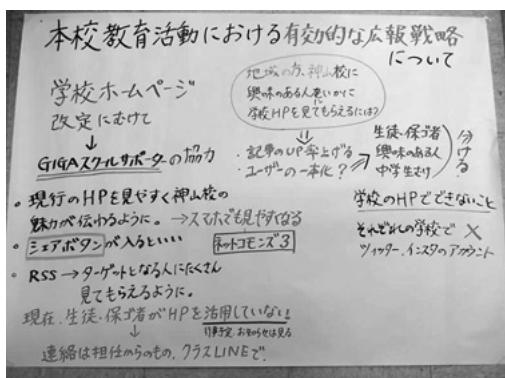


【第2回分科会】

第2回は学校ホームページの改訂に絞って意見を交換した。現行のホームページは、とても字が多くて、なかなか中学生や保護者、在校生が興味を持って見るというのは少ないと思われる。さらに、最近の若者や保護者は「スマートフォン」で見ることがほとんどである。今回の改訂は、そのスマホでも見やすいように改訂が入る予定になっている。



Sansanの辰濱さんより、専門家としての貴重なアドバイスをいただいた。そのアドバイスを、ホームページの改訂に取り入れていきたいと思う。写真、動画など、見ている人がパッと目を引くような“アイキャッチの活用”，そして更新の頻度を多くしていくことなど、神山校の特色が見えるように新しいホームページを作っていくたい。



③ まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開

第1回 10月30日

参加者 枝谷(神山つなぐ公社), 白桃・樋口(株式会社 Food Hub Project), 山口(下分保育所長), 林(広野保育所長), 濑部, 草本

まめのくぼの圃場で展開されている現状の共有を行った。圃場整備については周辺を含めた維持管理に多大な時間を要するため、今後は授業内容の精選が必要であるとの課題や、城西高等学校食品科学科と連携した商品開発の計画について話題提供があった。

参加者からは、神山小麦を通した保育所の子どもたちへの食育についての提案があった。

今後の展開の可能性は広がる一方であるが、まずは神山小麦の栽培、収穫、商品開発、販売のサイクルを小さくても回していくことに重点をおいていくことを共有した。

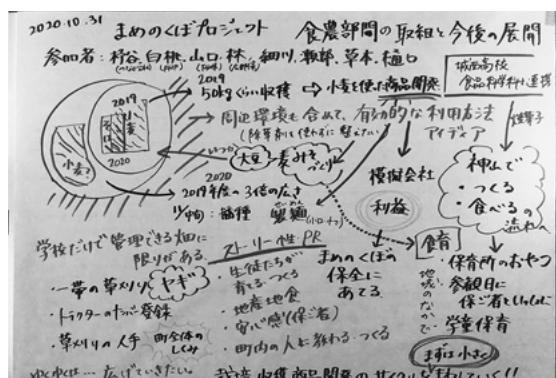
第2回 1月22日

参加者 後藤(町長), 安永(四国大), 枝谷(神山つなぐ公社), 樋口(株式会社 Food Hub Project), 宮崎, 草本, 濑部

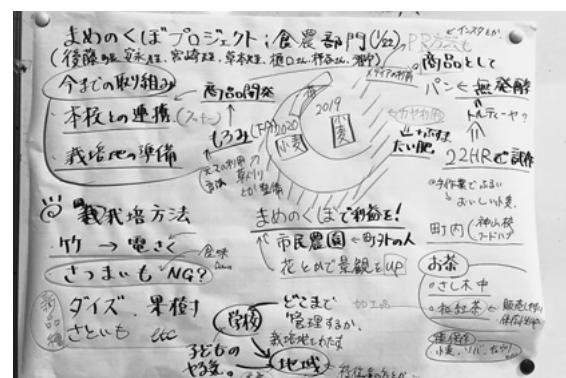
授業で進めている神山小麦の試作（タルト, クッキー）やパン作りの計画を共有し、参加者からは今後の取り組みに対する期待や提案が聞かれた。シードバンクの視点では小麦、蕎麦に加えてきゅうりの栽培の提案があり、圃場の有効活用の視点では、お茶の栽培・加工の案が出された。

神山小麦の商品開発に関して、製粉時に出てくるふすまの活用、もろみの販売等のアイディアとあわせて、PRについても検討を進めていくことが必要との意見が出された。

圃場の管理、商品開発共に、生徒たちの意欲を喚起するような仕掛けが必要であるとの認識を共有できた。



10月31日



1月22日

④ まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開

1 会議次第

第1回

① まめのくぼとは、どのような場所か、②4月～9月までの取組を報告、③実習地を動画で紹介、④研究協議を行った。

第2回

① 1月までの取組について報告、②前回の研究協議の振り返り、③研究協議を行った。

2 研究協議

第1回 議題 ① まめのくぼ「環境系」で今後、どんな取組ができるのか。

② 環境デザインコースで育てたい力との連結をどうするのか考える。

次の図のような案が挙がった。議題②については、時間不足のため、話し合いできなかった。

畑	環境保全型	3年間を通した、課題解決型学習の展開
<ul style="list-style-type: none">・昔の棚田に戻す 元は田んぼで稲作に適している。 イネやコムギ栽培を実践する場。・石積みを伝える場に発展させる・緑肥植物を使って土壌を改良・採算が取れるメイン農作物は、何か。品目、耕作面積、人員を決める。	<ul style="list-style-type: none">・農耕地を守る・集落にとってどういう場所にすべきかを地域の方々と考える。・里山の風景を保つ。例えば杉林を広葉樹に変えていくべきである。・補助事業を駆使する	<ul style="list-style-type: none">・畑 + a の景観としての提供ができるのではないか。例えば、人を呼べるものとして、LIVE会場、小屋、ピザがまの場にする。・林業系、木工系、に関心がある生徒に提供する場

※農業に関わる職業人を育成する

第2回 議題 焦点を絞って、次年度以降の取組を計画する。

例) 景観をつくる、里山の保全等。

まめのくぼの可能性を探りながら、次の案をまとめた。

景観をつくる

○現状の調査と測量をする

○どこまでの範囲なのかを決める。現状：5段目まで

○水路の復活はできているのか。

水源はどこにあるのか。雨乞いの滝へ行く途中から分岐している

○スギの活用を具体的にする

補助金に頼る。

木の植生分布を調べる。

スギを伐採して、何を植えるのかを決める。

→広葉樹林を植えて、観光や教材に向けた整備を考える。

里山の保全

○集落にとっての10年後は、どんな姿を目指しているのか。

○水路側の桜の木を生かした名所にできないか。

○ジオラマをつくり、教材にする。

例えば、畑にするには何を育てる、杉林で植栽する場合の将来の姿等。

3 まとめ

専門家らの意見がどれも活動に結びつけやすい内容でだった。コンソーシアム会議の意見をもとに、学習活動を展開したい。本年度は、石積みや水路の整備を中心に生徒と取組をした。

しかし、生徒から2学期末考査で、まめのくぼでしたいことが先生ばかりが主導でわかりにくいという意見があった。授業のたびに学習シートを使い、本時ねらいや活動の振り返りと次回の予告を記入させる必要があったように感じた。学習活動が生徒にとって見やすく、わかるよう進めるためにどうするのかについて担当教員同士で話をていきたい。

IV 成 果 · 課 題

1 今年度の成果目標と評価

(1) 本構想において実現する成果目標の設定

- ① 本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合50%（目標値50%）
- ② 自分たちの取組が地域貢献につながっていると感じる割合75%（目標値80%）
- ③ 高校時代を過ごした地域で働いたり暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいと考える生徒の割合44.4%（目標値80%）
- ④ 新入生の体験入学参加者割合63.3%（目標値90%）

(2) 地域人材を育成する高校としての活動指標

- ① 校庭マルシェ開催回数1回（目標値4回）、森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数8回（目標値5回）、孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数0件（目標値2件）、石積み実習の実施回数7回（目標値4回）、コース研修の実施回数0回（目標値2回）
- ② 研究活動の発表回数3回（目標値10回）
- ③ 本構想に関する教員研修の実施回数3回（目標値3回）、本構想に関する研究授業の実施回数2回（目標値1回）

(3) 地域人材を育成する地域としての活動指標

- ① スタディツアーワークの実施回数0回（目標値2回）、コンソーシアム活動回数2回（目標値4回）、耕作放棄地対策活動回数24回（目標値10回）、生産・保管している在来種・固有種の品種の数37種（目標値40種）
- ② ホームページでの取組紹介14回（目標値10回）
新型コロナウイルス感染症の影響により、校外での活動や校内に講師を招いての研修等が制限され、十分な成果を上げることができなかつた。生徒、職員のみで取り組む活動では、地域の課題解決についてどうすれば良いかを十分に考え実践することができ、意欲的に取り組むことができるようになってきた。

2 次年度以降の課題及び改善点

次年度は学科再編により「地域創生類」として入学した生徒が3年生になり、初めて3学年揃うことになる。2年生までの学校設定科目「神山創造学」から3年生での「課題研究」への効果的な接続を図ること、また生徒に地域の担い手として具体的に果たすべき役割を自覚させ、学校や地域での学びを相互に結びつけて各自が進路実現につなげることができるようになることが課題である。具体的には、今年度「神山創造学Ⅱ」で取り組んだチームプロジェクトの経験を生かして「課題研究」でのマイプロジェクトに発展させる取組をより進化させていくとともに、事業開始から2年間カリキュラム開発等専門家からの助言やコンソーシアム会議等で協議してきたことを踏まえ、まめのくぼプロジェクトでの耕作放棄地を活用した地域貢献活動、景観保全活動、6次産業化学習で地域と協働した取組を進めていく。

また、今年度職員研修やコンソーシアム会議において生徒に身に付けさせたい力についての共通理解に努めてきたが、生徒に育成する資質・能力とその到達度を共有するためのグランドデザインや3年間を見通したルーブリックの作成までには至らなかった。次年度はそれを作成したうえでコンソーシアムとも共有し、生徒の育成目標の明確化と生徒募集での有効活用を図る。さらに、事業終了後を見据え、コンソーシアムとの連携の在り方について協議を行い、コミュニティ・スクールとして学校運営についてのビジョンを共有し協働して活動できる組織作りを進める。

V 資 料

ふりがな	とくしまけんりつじょうせいこうとうがっこうかみやまこう	指定期間 2019～ 2021
学校名	徳島県立城西高等学校神山校	

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合					
a	本事業対象生徒 : 24.0% 50.0% 50%					
a	本事業対象生徒以外 : 17% 17% — — —					
目標設定の考え方：本事業に関連する授業内外の活動を経験して、自らが希望した進路を実現できる生徒の割合						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 自分たちの取り組みが地域貢献につながっていると感じる生徒の割合					
b	本事業対象生徒 : 74.7% 75.0% 80%					
b	本事業対象生徒以外 : — — — — —					
目標設定の考え方：校内アンケートを実施						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 高校時代を過ごした地域で働きたい暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいと考える生徒の割合					
c	本事業対象生徒 : 55.7% 44.4% 80%					
c	本事業対象生徒以外 : — — — — —					
目標設定の考え方：校内アンケートを実施						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 校庭マルシェ開催回数					
a	— — 2回 1回 4回					
目標設定の考え方：2年生神山創造学のチームプロジェクトの一環で生徒たちが企画し、実施する回数						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数					
a	— — 7回 8回 5回					
目標設定の考え方：2年生神山創造学のチームプロジェクトの一環で生徒たちが企画し、実施する回数						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数					
a	— — 2件 0件 2件					
目標設定の考え方：孫の手プロジェクト自体は例年10～17回ほど依頼がある。そのうち石積みに関する依頼件数						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 石積み実習の実施回数					
a	— — 6回 7回 4回					
目標設定の考え方：孫の手プロジェクトとして有償で依頼を受けるまでのトレーニングとして実習を行う回数						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コース研修の実施回数					
a	— — 1回 0回 2回					
目標設定の考え方：コース別で生徒が実地研修を行う回数。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 研究活動の発表回数					
b	5回 10回 10回 3回 10回					
目標設定の考え方：校外で生徒または教職員が研究活動内容を発表する回数						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 本構想に関する教員研修の実施回数					
c	— 5回 3回 3回 3回					
目標設定の考え方：学期ごとに本構想の振り返りを教員間で実施する回数						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 本構想に関する研究授業の実施回数					
c	— — 2回 1回 3回					
目標設定の考え方：教職員やコンソーシアム構成組織、運営指導委員会のメンバーらが見学することのできる研究授業の回数						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)					
	スタディツアーの実施回数	1回	—	1回	0回	2回
目標設定の考え方：生徒、教員、コンソーシアム構成員等、多様な組み合わせで訪問する回数						
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)					
	コンソーシアム 活動回数	—	—	3回	2回	4回
目標設定の考え方：コンソーシアム構成組織へ呼びかけ、学校見学や進捗状況の報告・議論等を行う回数						
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)					
	耕作放棄地対策 活動回数	—	—	15回	24回	10回
目標設定の考え方：耕作放棄地を活用して作物を生産できる環境を活動を行う回数						
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)					
	生産・保管している在来種・固有種の品種の数	30種	35種	37種	37種	40種
目標設定の考え方：高校と協力して在来種・固有種の種および苗を生産・保管している種類の数						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					
	ホームページでの取組紹介	—	—	6回	14回	10回
目標設定の考え方：神山町のホームページに城西高校神山校と連携した取組を掲載する。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）	88	89	81	85	0
本事業対象生徒数			81	85	
本事業対象外生徒数			0	0	

高校魅力化評価システム 診断結果

(抜粋)

※()の数値は昨年度の値である

1. 生徒の学習活動の機会

	全 体(%)	他地域との差(pt)	備 考(昨年度より10pt以上増加した項目)
主体性に係る機会	53.6(52.9)	3.39 (6.6)	・自主的に調べものや取材を行う 57.1% (+12.04pt)
協働性に係る機会	77.0(74.5)	3.08 (4.49)	
探究性に係る機会	67.6(61.3)	-1.17 (034)	・生徒同士で活動、学習の振り返りを行う 73.8% (+11.06pt)
社会性に係る機会	51.2(46.4)	-2.84 (2.78)	

2. 地域の学習環境

	全 体(%)	他地域との差(pt)	備 考(昨年度より10pt以上増加した項目)
主体性に係る機会	76.8(67.1)	1.65 (6.6)	・挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある 89.3% (+10.54pt) ・目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる 75.0% (+10.00pt) ・人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある 67.9% (+17.86pt) ・自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる 89.3% (+13.04pt)
協働性に係る機会	78.9(67.8)	1.75 (4.49)	・ありのままの自分が尊重される雰囲気がある 77.4% (+13.63pt) ・立場や役割を超えて協働する機会がある 81.0% (+15.95pt)
探究性に係る機会	83.3(75.9)	2.89 (034)	・将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる 82.1% (+13.39pt)
社会性に係る機会	73.2(65.6)	3.80 (2.78)	・地域の人や課題などにじかに触れる機会がある 78.6% (+14.82pt)

3. 生徒の自己能力認識

	全 体(%)	他地域との差(pt)	備 考(昨年度より10pt以上増加した項目)
主体性	57.7(57.7)	-9.19 (-5.31)	
協働性	65.9(65.9)	-11.56 (-8.18)	
探究性	53.3(52.3)	-9.98 (-6.93)	・学習を通じて、自分のしたいことが増えている 84.5% (+17.02pt)
社会性	55.5(53.0)	-5.79 (-5.73)	・地域の課題と世界での課題は関連していると思う 63.1% (+13.10pt)

4. 生徒の行動実績

	全 体(%)	他地域との差(pt)	備 考(昨年度より10pt以上増加した項目)
主体性に係る行動	58.3(52.9)	-6.72 (-8.93)	
協働性に係る行動	64.9(52.9)	-5.24 (-13.61)	・友人などから、意見やアドバイスを求められた 63.1% (+14.08pt)
探究性に係る行動	44.6(45.1)	-16.15 (-11.46)	
社会性に係る行動	48.8(34.6)	3.72 (-14.67)	・いま住んでいる地域の行事に参加した 8.1% (+20.45pt) ・地域社会などでボランティア活動に参加した 39.3% (+13.80pt)

5. 満足度

	全 体(%)	他地域との差(pt)	備 考
今の生活全般に対する満足度	60.7(48.8)	-2.45 (-13.11)	
この学校に入って良かったと思う	89.3(82.5)	5.05 (0.56)	

教育活動

(1) 教育課程

平成30年度入学生

教 科	科 目	生 活 科				造園土木科			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	2	2		4	2	2		4
	数学 A			2	2			2	2
	数学活用			○ 2	○ 2			○ 2	○ 2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	生物基礎		2	2	4		2	2	4
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I・美術 I	☆ 2			☆ 2	☆ 2			☆ 2
外 国 語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			● 2	● 2			● 2	● 2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報			○ 2	○ 2				
	リビングデザイン		3		3			○ 2	○ 2
	フードデザイン		2	3	5				
農 業	農業と環境	2			2	2			2
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2		2		2
	野菜			● 2	● 2				
	果樹			2	2			● 2	● 2
	草花	2	2		4				
	農業機械							○ 2	○ 2
	植物バイオテクノロジー	2	2		4				
	森林科学							○ 2	○ 2
	造園計画					2	2	2	6
	造園技術						2	4	6
	環境緑化材料					2	1		3
	測量					2	2		4
	生物活用			3	3				
○神山創造学		1	2		3	1	2		3
総合的な学習の時間 (代替:課題研究)									
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の()は内数、時間外実習を表す

平成31年度入学生

教 科	科 目	類(コース)・ 学年		地域創生類					
		環境デザインコース				食農プロデュースコース			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	3			3	3			3
	数学 A		2		2		2		2
	○数学探究			2	2			2	2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	物理基礎			● 2	● 2			● 2	● 2
	化学基礎			○ 2	○ 2			○ 2	○ 2
	生物基礎		2		2		2		2
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I ・ 美術 I ・ 工芸 I	☆ 2			☆ 2	☆ 2			☆ 2
外 国 語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			2	2			2	2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報							○ 2	○ 2
	子ども文化							2	2
	フードデザイン						2	2	4
農 業	農業と環境	4			4	4			4
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2	2			2
	野菜						2		2
	果樹			● 2	● 2			● 2	● 2
	農業機械			○ 2	○ 2				
	植物バイオテクノロジー						2		2
	森林科学		1	2	3				
	造園計画		2	2	4				
	造園技術		2	2	4				
	環境緑化材料			2	2				
	測量		2		2				
	生物活用							2	2
	グリーンライフ						1	2	3
特 活	○神山創造学 I	2			2	2			2
	○神山創造学 II A		4		4				
	○神山創造学 II B						4		4
	総合的な学習の時間 (代替: 課題研究)								
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の()は内数、時間外実習を表す

令和2年度入学生

教 科	科 目	類(コース)・ 学年		地域創生類					
		環境デザインコース				食農プロデュースコース			
		1	2	3	計	1	2	3	計
国 語	国語表現			2	2			2	2
	国語総合	2	3		5	2	3		5
地 歴	世界史 A		2		2		2		2
	地理 A	2			2	2			2
公 民	現代社会			2	2			2	2
数 学	数学 I	3			3	3			3
	数学 A		2		2		2		2
	○数学探究			2	2			2	2
理 科	科学と人間生活	2			2	2			2
	物理基礎			●2	●2			●2	●2
	化学基礎			○2	○2			○2	○2
	生物基礎		2		2		2		2
保 体	体育	2	2	3	7	2	2	3	7
	保健	1	1		2	1	1		2
芸 術	書道 I ・ 美術 I ・ 工芸 I	☆2			☆2	☆2			☆2
外 国 語	コミュニケーション英語 I	3	2		5	3	2		5
	英語会話			2	2			2	2
家 庭	家庭総合	2	2		4	2	2		4
家 庭	生活産業情報							○2	○2
	子ども文化							2	2
	フードデザイン						2	2	4
農 業	農業と環境	4			4	4			4
	課題研究			4	4			4	4
	総合実習	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)
	農業情報処理	2			2	2			2
	野菜						2		2
	果樹			●2	●2			●2	●2
	農業機械			○2	○2				
	植物バイオテクノロジー						2		2
	森林科学		1	2	3				
	造園計画		2	2	4				
	造園技術		2	2	4				
	環境緑化材料			2	2				
	測量		2		2				
	生物活用							2	2
	グリーンライフ						1	2	3
	○神山創造学 I	2			2	2			2
	○神山創造学 II A		4		4				
	○神山創造学 II B						4		4
	総合的な学習の時間 (代替: 課題研究)								
	単位数合計	30	30	30	90	30	30	30	90
特 活	ホームルーム活動	1	1	1	3	1	1	1	3

備考 (1) ☆, ○, ●は選択科目

(2) 総合実習の()は内数、時間外実習を表す

令和 2 年度 文部科学省指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）
研究開発報告書（第 2 年次）

令和 3 年 3 月 発行
発 行 徳島県立城西高等学校神山校
所 在 地 〒771-3311
徳島県名西郡神山町神領字北399
印 刷 徳島県教育印刷株式会社

